ジョセフ・ヒコの幕末維新

井上脩身 著

ジョセフ・ヒコの幕末維新

井上脩身 著

明治150年企画

ジョセフ・ヒコの幕末維新①

中浜万次郎編

ペリー来航前夜の太平洋

文・写真　井上脩身

写真左：ヒコの肖像（播磨町郷土資料館編『ヒコの生涯と新聞史』より）

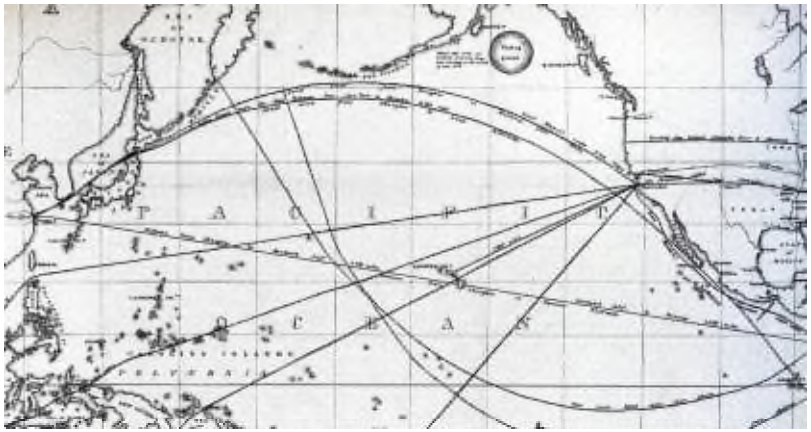
写真右：ペリーの肖像（了仙寺蔵）＝絵はがきより

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

私（筆者）はこの数年、ペリーに関心をもち続けている。黒船を率いて艦砲という軍事力をちらつかせて幕府に開国を迫ったあのペリーである。きっかけは、あるセミナーでペリーがアメリカ東海岸から大西洋、インド洋を経て日本にやってきたと聞いたことだ。恥ずかしい話だが、ペリー来航を習った小学生のころ、ペリーが太平洋を横断してやって来たのだと思っていた。いったん思い込むと、頭の記憶庫に入りこんで離れない。だから７０歳になってペリーが長駆、地球を４分の３も回ってきたと知ったとき、新鮮な驚きを覚えた。ペリーは翌年もまた江戸湾に姿を現している。この並々ならぬ執念は、ある目的に断固として到達しようとする強い決意を秘めていたことを示しているのではないのか。セミナーでは捕鯨船の寄港地を得るため、との説明だった。果たしてそれだけだっただろうか。私はペリー関係の書物を読みあさった。そうするうち一人の漂流民が浮かび上がった。播州生まれの彦蔵である。遠州灘で漂流した彦蔵はペリー艦隊で日本に帰ろうとしていたという。結局、ペリーの黒船には乗らずにアメリカにわたり、洗礼を受けてジョセフ・ヒコという名のアメリカ市民になる。やがてヒコは日本に戻り、“アメリカ人”の通訳として、新聞人として、商人として幕末維新を生きる。ヒコはペリーと会うことはなかったが、ペリー来航によって開国から維新へと歴史の道が進まなかったならば、ヒコは鎖国とキリシタン禁令という深い沼の底に沈んでいただろう。今年は明治維新１５０年である。日本人でありアメリカ人でもあるヒコという人物を知ったいま、できることならヒコの目の中に入って幕末、維新を見てみたいと思った。

（漂流民、彦蔵はヒコになったからこそ、歴史にその名を刻んだ。本シリーズでは基本的にジョセフ・ヒコの名前を使う）

蒸気船航路の津軽海峡



蒸気船航路計画図（『忘れられた黒船』講談社選書より）

書店で幕末関係の本のページをペラペラと繰っていて、一つの図版に私の目はくぎづけになった。太平洋上に引かれた弧形の線の一方の端はアメリカ西岸、もう一方の端は中国。その中国寄りのところで、線は津軽海峡を通っている。図版のキャプションには「蒸気船航路計画図（部分、アメリカ議会図書館蔵）とある。放物線は計画航路なのだ。

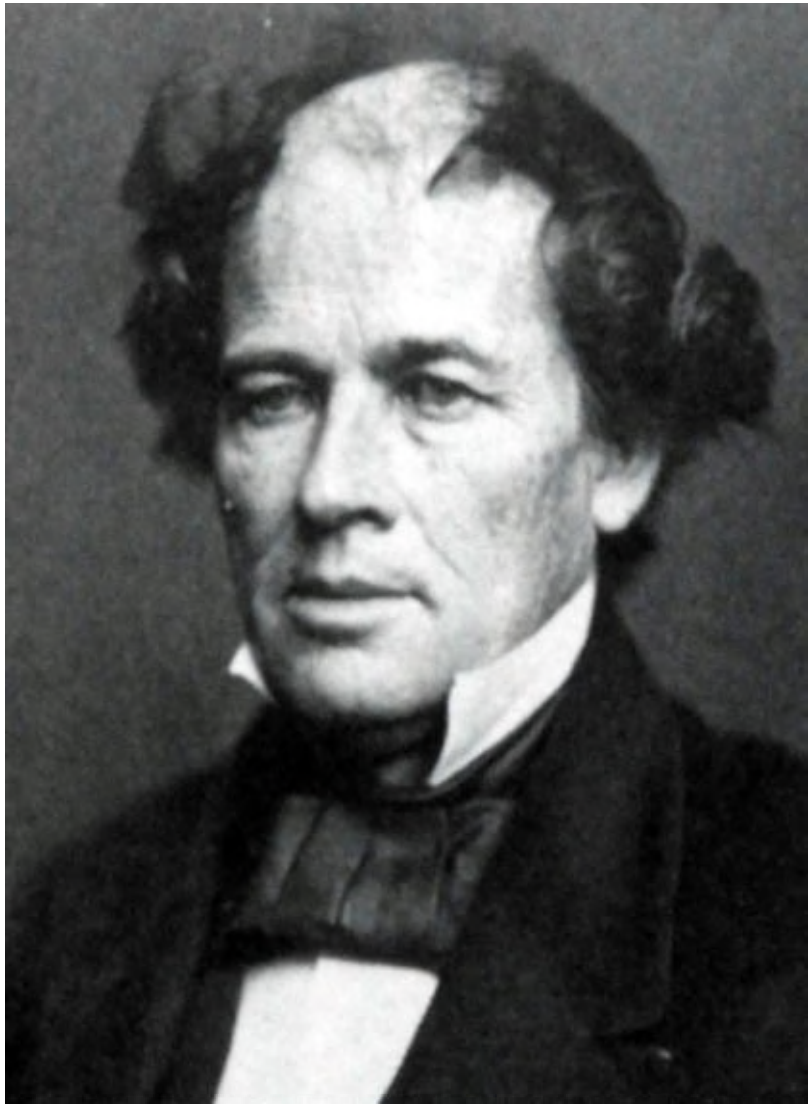
本は、後藤敦史・京都橘女子大の『忘れられた黒船』（講談社選書）である。２０１７年に刊行された。黒船を引き連れたペリーによって「日米和親条約」締結の運びとなった折り、ペリーは下田のほかは函館と那覇の開港を幕府に求めた（『ペリー提督日本遠征記』角川ソフィア文庫）。下田は江戸湾から大きくは離れていない。那覇は浦賀に来る前にペリーは何度も上陸している。この２港については開港理由がわかるが、函館を要望した理由がわからなかった。この本に載っている図表の計画航路が津軽海峡を通っていることがその答えではないのか。と思うと私の胸は高鳴った。

ペリー来航によって幕末の動乱が始まったが、ペリーがこの航路計画を念頭に入れていたとするならば、幕府終焉の大元はこの航路計画ということになるではないか。私は躊躇なくこの本を買い求め、じっくりと読んだ。

同書によると、航路計画を立てたのはマシュー・F・モーリー（１８０６～７３）。１８４２年にアメリカ海軍海図・船具局長に就任したモーリーは太平洋海域に関する情報を集め、太平洋上の鯨の生息海域を示す図を作成したことで知られる。アメリカが太平洋岸に到達したのを受けて４８年、下院の海軍委員、トーマス・キングが「日本及び中国の沿岸にいたる広大な海のかなたまで視野を広げる必要がある」として、北太平洋に蒸気船を開設すべきだ、との提言書を提出。そこには「サンフランシスコまたはモントレーから、上海、広東にいたる蒸気汽船航路」という青写真が示されていた。

注目すべきなのはそのルートだ。現在、サンフランシスコから成田への航空路は、地球が円形であることによって距離が最も短くなるアリューシャン列島接近ルートになっている。通常の平面地図の上では弧を描いているように見えるこの「大圏航路」に着目したのがモーリーだった。

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新



マシュー・Ｆ・モーリー（『忘れられた黒船』講談社選書より）

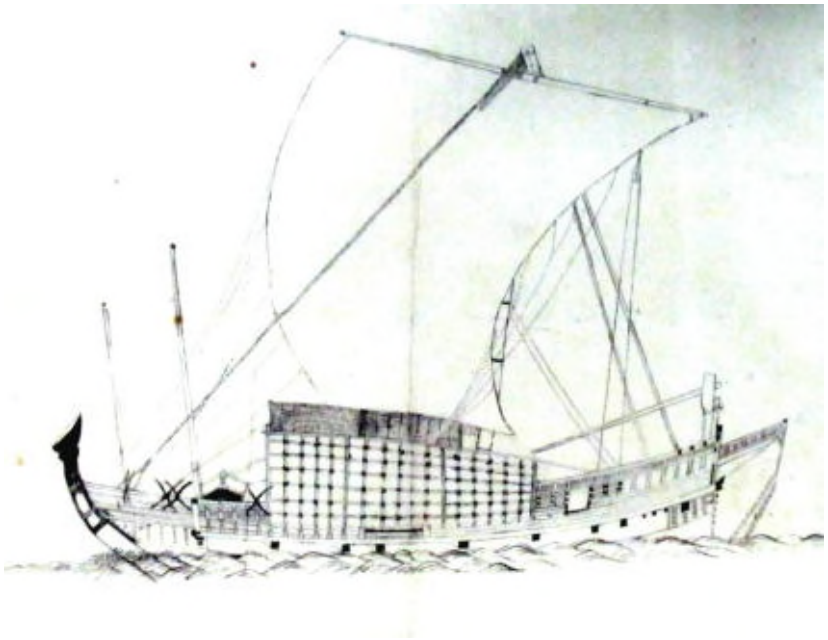
すでにニューヨークなどのアメリカ東海岸からパナマを経て中国に向かうルートとしては、サンドウィッチ諸島（ハワイ諸島）経由の航路が想定されていたが、モーリーはパナマ―中国間は、サンドウィッチ諸島経由路約９５００海里（約１万８０００キロ）、大圏航路約８２００海里（約１万５０００キロ）と計算。大圏航路の方が距離が短いだけでなく、サンドウィッチ諸島経由航路では中国まで石炭を補給できる港がない、と指摘した。こうしてモーリーが描きだした計画図が冒頭に述べた図版である。モーリーのこの計画図をもとにキングは提言したのだ。

図版には大圏航路として上下２本の弧が描かれている。上の線はサンフランシスコ付近から上海付近に、下の線はパナマ付近から上海付近に引かれている。そのいずれも津軽海峡付近で合流して上海方面に向かっている。モーリーとキングはサンフランシスコからであれ、パナマからであれ、蒸気船で上海に向かうには津軽海峡経由が最短かつ最適コースと認識していたのだ。

繰り返すが、ペリーが率いたのは黒船である。実際には最初の浦賀来航（１８５３年６月）の際は４隻中旗艦のサスケハナ号とミシシッピー号の２隻が、２回目（１８５４年１月）の来航のときは９隻中サスケハナ号、ミシシッーピー号に加えてポーハタン号の計３隻が蒸気船だった（来航年月は三谷博『ペリー来航』吉川弘文館による）。

アメリカ生まれのロバート・フルトンがセーヌ川で外輪の蒸気船を航行させたのは１８０３年。フルトンは０７年にニューヨークで蒸気船の航行に成功させている。蒸気船は当然のことながら石炭がなければ動かない。当初は確実に石炭を補給できる河川で細々と運航された。

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新



漂流者が帰国後描いた図を基に作図された栄力丸（播磨町郷土資料館展示資料より）

この蒸気船に注目したのがペリーだ。１８４１年、海軍工廠の長官に補せられると蒸気艦の導入に力を入れ、４６年、メキシコとの戦争で司令官に任じられると、蒸気艦ミシシッピー号を旗艦として参戦。１６カ月の連続使用に耐え、全航海の４分の１を気走できた（曽村保信『ペリーは、なぜ日本に来たか』新潮社)。こうしたことからペリーは「蒸気海軍の父」と呼ばれるようになる。

１８４８年、メキシコ戦争終結にともなうグァダルーペ・イダルゴ条約によってカリフォルニアを得たアメリカは太平洋にも面することになった。翌年、カリフォルニアで金鉱山が見つかり、サンフランシスコは空前のゴールドラッシュにわいた。前年の１０００人の町から２万５０００人の西海岸きっての都市に変貌したのだ。ペリーが来航する前、サンフランシスコは東洋に向かう蒸気船の拠点港として大いなる可能性を秘めていたのである。

ペリーはアメリカをたつ前、可能なかぎり日本に関する文献や資料に目を通していた。モーリーの航路計画図にある津軽海峡に箱館という港があることも知っていたはずである。ペリーが箱館の開港を要求したことは、サンフランシスコ―箱館―上海というルートがアメリカ側に想定されていたことの証しといえるだろう。

サンフランシスコの真向かい（大海原を隔てているとはいえ）の大都市は江戸である。サンフランシスコ―箱館―上海ルート設定のためには、江戸の政府の鎖国の殻をぶち破るしかない、とペリーが考えたとしてもおかしくない。言い換えるならば、サンフランシスコの地政学上の価値がペリー来航の謎を解くうえでの重要なカギなのだ。

私は、ジョセフ・ヒコを通して幕末明治維新を見ようとしている。１８４９年、フォーティーナイナーズと呼ばれる人たちが一攫千金を狙ってサンフランシスコの港に押し寄せていたころ、ヒコは播州の農漁村で寺子屋に通う船乗りの子だった。まだ１２歳。翌年、乗り込んだ船が暴風に遭って漂流民になり、サンフランシスコに行くことになろうとは毛頭知るよしもない。

鎖国体制のなかの廻船遭難

ヒコが乗った「栄力丸」が遭難したのは１８５０年１０月３０日である。５０余日、太平洋上を漂流し、アメ

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

高田屋嘉兵衛顕彰碑（右奥）がある竹尾稲荷神社

リカの商船「オークランド号」に救出された。『アメリカ彦像自伝』（平凡社）や『開国逸史――アメリカ彦蔵自序伝』（ミュージアム図書）、『彦蔵漂流記』（「海外渡航記叢書４、雄松堂所収）などによると、栄力丸は摂州菟原郡大石村の醸造家、松屋八三郎の持ち船だったという。菟原郡大石村は現在の神戸市灘区大石。灘五郷のうち西郷があったところだ。１７７０年ごろに上灘として酒造りが行われはじめたが、１８２８年、上郷が西組、中組、東組に分かれた。西組が西郷にあたり、現在、沢の鶴、金盃、福久娘の銘柄で造られている。

灘で醸造された酒は江戸初期から「下り酒」として船（菱垣廻船）で運ばれたが、酒以外に多用な荷物を載せることから出港まで時間がかかった。酒は腐敗しやすい。輸送時間を短縮させる必要があるため、酒問屋は１７３０年、従来の廻船を仕切っていた問屋を脱退、酒専用の樽廻船問屋を結成した。

樽廻船は従来の菱垣廻船の船倉を広くしたものだ。当初、酒以外の荷物も安い運賃で運んだが、菱垣廻船と競合することから、１７７０年、酒と米、糠など７品に限って輸送するという積荷協定が結ばれた。しかし天保の改革（１８４１年）以降、株仲間の解散などで、樽廻船が輸送面で優勢になっていた。

天保の改革後、上方―江戸間の船輸送の主流が樽廻船になるなか、灘の醸造家の持ち船も酒以外のものをできるだけ積んで、少しでも儲けを得ようとした。栄力丸も例外ではない。酒１９３１樽のほか醤油、砂糖、紙、茶、荒物などを積んで、江戸廻船問屋、中西新八郎に送り届けたという。江戸から兵庫への帰り船には大豆１８２俵、小豆２００俵のほか胡桃、鰯粕、大麦、小麦が積み込まれた。

しかし、この稼ぎは「板子一枚底は地獄」といわれる危険との隣り合わせだった。幕府は１６３５年、５００石以上の船を禁止した。３年後に商船については例外としたが、千石船でも全長２９メートル、幅７・５メートル、１５人乗り程度で積載重量は１５０トンだった。樽廻船は１４００石から１８００石が主力だったとされ、栄力丸もおそらくこの規模の船だっただろう。当時としてはかなりの大型船だが、甲板がない一種のお椀状の船であるため、暴風雨に見舞われるとひとたまりもなかった。

１９世紀になると高田屋嘉兵衛（兵庫）３８隻、木屋藤右衛門（加賀・栗ケ崎）２２隻、右近権左衛門（越前・河野）２１隻、柏屋四郎兵衛（近江・日枝）２０隻など数多くの船を持つ船主が登場、商品経済の担い手となった。商品経済が盛んになると船運が活発になる半面、廻船間の競争が激しくなる。直線ルートをとって寄港を減らせば競争に勝つことができ、稼ぎが格段に大きくなる、と船頭たちが考えるのも無理はない。だがそれはなかば冒険でもある。現に、遭難が後を絶たなかった。

「江戸時代の漂流例」（小学館『海と列島文化別巻、漂流と漂着』所収）として挙げられている資料によると、

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

１９世紀に入ってヒコが乗った栄力丸の遭難までに１３件の遭難があった。以下の通りである。() 内は帰国者からの聴取などに基づく記録や日記などの史料。

①１８０６年、大坂の稲若丸（８人乗り組み）が下田沖で遭難。アメリカ船に救助されハワイに上陸。マカオ、広東に行ったが帰国を拒否されてバタビアへ。病死した２人を除く６人がオランダ船で日本に送られるが、航海中に３人が死亡。長崎に着いた３人のうち１人が上陸前に死亡、１人が揚げ屋で自殺し、善松だけが帰郷。(芸州善松北米漂流譚、夷番漂流帰国目録)
②１８１０年、摂津の歓喜丸（１６人乗り組み)。紀州沖で遭難、カムチャッカ半島に漂着。オホーツクに送られ、ロシア軍艦で６人がクナシリ島に帰還。片足を切り落とした久蔵が遅れて箱館に帰還。(魯斉亜国漂流機聞書)
③１８１２年、薩摩の永寿丸（２５人乗り組み)。紀州沖で遭難、１０カ月漂流し１３人が死亡。千島列島ハラマコタンに漂着した際、６人が水死。上陸後３人が死亡。生き残った３人がペトロハバロフスクに送られた後エトロフ島に向かったが接岸できず、ペトロハバロフスクに戻り、④の督乗丸の３人と合流し、ロシア船でウルップ島沖に送られ、小舟で帰還。(永寿丸魯国漂流記)
④１８１３年、尾張の督乗丸（１４人乗り組み)。遠州灘で遭難。４８４日間漂流、１１人が次々に死亡。生き残った船頭重吉ら３人がカリフォルニア沖で英国商船に救助。カリフォルニア・サンタバーバラに上陸し、アラスカ、カムチャッカを経て永寿丸の３人と合流した後、１人死亡。結局２人が帰還。(船長日記、尾薩漂民私記、督乗丸漂流記)
⑤１８２０年、陸奥の神社丸（１２人乗り組み)。房総沖で遭難しパラオ諸島に漂着。生き残った８人がシャム（タイ）に脱出、マカオから乍浦へ。その間１人死亡。７人が中国船に分乗したが漂流し、それぞれ屋久島、遠州下吉田村に漂着。長崎に帰国したが揚げ屋で１人死亡。(ペラホ物語、パラウ漂流記)
⑥１８２７年、陸奥の融勢丸（１１人乗り組み)。常陸平潟沖で遭難し、バタン諸島に漂着。マニラ、温州府を経て全員長崎に帰国。(融勢丸唐流帰国記)
⑦１８３０年、備前の神力丸（１９人乗り組み)。熊野灘で遭難し、バタン諸島イブオス島に漂着した際、船が大破し５人が死亡。１４人がマニラ、マカオ、広東などを経て乍浦から長崎に帰国。(神力丸馬丹漂流口書)
⑧１８３５年、肥後の庄蔵丸（４人乗り組み)。天草沖で遭難し、ルソン島北部に漂着。マニラからマカオに送られ、尾張・宝順丸（１４人乗り組み、１８３２年、遠州灘で遭難し､アメリカ北西端のフラッタリー岬に漂着、ロンドンを経てマカオに送られる)の音吉ら３人と合流。１８３７年、アメリカ商船モリソン号で日本に送られるが、浦賀や薩摩で砲撃を受け、帰国を断念（モリソン号事件)。庄蔵は香港で洗濯屋か裁縫屋を開いて成功、力松は香港で新聞社に勤め、ともに日本人漂流民送還の世話をした。イギリス人となった力松は日米和親条約締結の通訳のために来日し、ヒコと会う。(漂客寿三郎手簡、安政二乙卯年雑録、栄力丸漂流記談)
⑨１８３８年、越中の長者丸（１０人乗り組み)。釜石唐丹浦沖で遭難、ミッドウェー諸島付近でアメリカの捕鯨船に救助。ハワイ諸島に上陸後、オホーツク、シトカを経てロシア船でエトロフ島に上陸。(時規物語、蕃談)
⑩１８３９年、奥州の中吉丸（６人乗り組み)。鹿島灘

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

中浜万次郎（ウィキペディアより）

で遭難し小笠原島に漂着。船を修理して帰還し、同島にアメリカ人ナザニエル・セボリーがいることを報告。(小友船漂流記)

⑪１８４１年、摂津の栄住丸（１３人乗り組み）。犬吠埼沖で遭難し、スペインの密貿易船に救助され、９人がメキシコ領カリフォルニアで捨てられる。マサトランで働いた後、善助と初太郎がマカオに向かい、さらにホノルルを経て再びマカオへ。各地で日本人漂流民と会い、乍浦から長崎に帰国。マサトランに残された者のうち４人がマカオに向かい、１人が寧波でイギリス役所の通訳になり、３人が乍浦から長崎に帰国。(永寿丸漂流口書、来航紀聞、初太郎漂流記、海外異聞、墨是可新話)

⑫１８５０年、紀伊の天寿丸（１３人乗り組み)。伊豆沖で遭難、北太平洋上でアメリカの捕鯨船に救助され、８人がロシア船に移乗。アメリカ船の５人はハワイで万次郎に、香港で庄蔵、上海で音吉に会う。乍浦から長崎に帰国。ロシア船の８人はシトカなどを経て、うち７人が帰国。(紀州船米国漂流記、漂流船聴聞)

残る１件は１８４１年に土佐湾で漂流した土佐の漁船である。この船に万次郎が乗っていたことから、後の世に最も知られる漂流物語になる。本稿では後述するようにヒコの遭難と対比する形で、万次郎を取り上る。

これらの遭難例はいずれも漂流民がなんとか生還できたケースである。帰国した漂流民の体験談があればこそ、その一部始終を記録として残すことができた。乗組員が船もろとも海に沈んだたケースがいったいどれくらいあったのか、その実数はわかっていない。ヒコが乗った栄力丸が遭難したとき、ヒコ自身、転覆したとみられる船の板材などを目撃していることからみて、この数倍の船が歴史に刻まれることなく消えてしまったことは間違いないだろう。

万次郎の漁船、ヒコの栄力丸を含め１５件の遭難はいずれも太平洋の沖合である。日本海側をいく北前船に漂流例がないのは意外だ。冬の日本海は荒いのが定評だが、いったん漂流すると果てしなく広がる太平洋の方がはるかに恐ろしい海だった。

北前船は蝦夷から日本海、瀬戸内海を経て大坂と結ぶ海運である。北前船と基本的には構造が変わらない和船で上方と江戸という太平洋岸を航行せざるを得ないところに問題があった。江戸後期になって商品経済が膨張するのにともない、廻船流通の規模は拡大する。だが、鎖国を祖法として死守する幕府の構造船を認めない海運政策に根本的な問題があった。ヒコは幕府政策の矛盾のなかで船に乗ることになる。

太平洋捕鯨全盛のなかで

アメリカの捕鯨船の北太平洋捕鯨場図（『黒船異聞』有隣堂より）

太平洋沖で遭難が続いているころ、その洋上では、アメリカの捕鯨船が群れをなして鯨を追っていた。

アメリカの捕鯨は１７世紀後半、北米大陸の東端のナンタケット島で行われたのが始まりとされている。主に大西洋で捕鯨が行われたが、１８世紀の終わりころマッコウクジラを原料とするロウソクが上流社会で盛んに使われるようになり、太平洋に漁場が移った。１８１８年、ナンタケットに船籍を持つガーナー船長のグローブ船が太平洋の中心に出てマッコウクジラの群れを追いかけた。これが遠洋漁業の始まりとされている。さらに翌年、ジョセフ・アレン船長のマロー号が日本沿岸に達した。「日本漁場は有望」とアレン船長は故郷に手紙を書いている。（川澄哲夫『黒船異聞――日本を開国したのは捕鯨船だ』有鱗堂）

太平洋捕鯨によってアメリカ捕鯨は全盛時代を迎える。同書によるとアメリカの捕鯨船数は、１８１９年は５２隻に過ぎなかったのに、１８３３年には３９２隻、合計トン数が１３万トンになり乗り組んだ鯨捕りは１万人にのぼった。さらに１８４３年には６７５隻、約２０万トンにのぼったという。

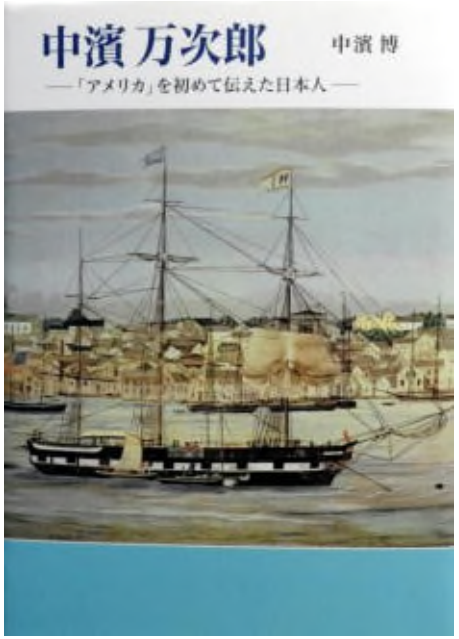
同書には１８６５年ころまでのアメリカの捕鯨船によるマッコウクジラの捕獲位置が黒丸で示されている。この図版では房総半島沖は真っ黒に塗りつぶされている。江戸のすぐ近くで数多くの捕鯨船が操業をしていたのだ。それを鎖国の底で惰眠をむさぼっていた幕府が気づいていなかったというのは、滑稽というしかない。

幕府役人が知らないのだから、土佐の一漁民が知っているはずはない。１８４１年１月２７日（天保３年１月５日）、土佐国高岡郡宇佐浦から１隻の漁船が出漁に出た。船頭の筆之丞と重助、五右衛門、寅右衛門それに万次郎の５人が乗り組んでいた。万次郎は足摺岬近くの漁村、中ノ浜で生まれた。１４歳のとき「漁師になりたい」と、筆之丞の舟で土佐のほぼ中央に位置する宇佐にやってきた。

ここからは万次郎のひ孫で心臓外科医、中濱博氏が２００５年に著した『中濱万次郎――「アメリカ」を初めて伝えた日本人――』（冨山房インターナショナル）を中心に、万次郎の孫、中浜明氏の『中浜万次郎の生涯』（冨山房、１９７０年刊）で補完しつつ、万次郎の人生をたどりたい。

当座の食料として米２斗５升と薪水を積んではえ縄漁に出たわずか７・６メートルの漁船は、激しい北西の風

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新



『中濱万次郎』の本の表紙

に巻き込まれて足摺岬沖で黒潮に流される。漂流７日後、鳥島に漂着して上陸。博氏の研究によると当時黒潮は太平洋沖で大蛇行をしており、このおかげで鳥島に着くことができた。「江戸時代の漂流例」でみた通り、遭難した船は小笠原諸島に漂着した奥州の中吉丸以外は、はるか遠方の外国に漂着するか、幸運にも外国船に発見されたケースばかりだ。万次郎が乗った漁船が鳥島に着かなければさらに漂流し、いずれ転覆して沈没したか乗組員が餓死したかのいずれかだろう。

鳥島はアホウドリの産卵地。その名の通り、いとも簡単に捕れることが第２の幸運だった。１４３日後、白い帆を上げた船が見えた。皆で助けを求めたが船は気づかず通り過ぎたが、万次郎が山の陰に停泊しているかもしれないと山を回ってみると、大きな船が停泊していた。万次郎の気転が５人を救うことになった。

彼らを救助したのは捕鯨船ジョン・ハウランド号。５人を乗せて捕鯨を続け、５カ月後にホノルルに着くまでに１５頭を捕獲した。「大勢で行う日本式の捕鯨と違い、少人数で鯨を捕る能率的な漁法に驚きと感銘を覚え、アメリカ捕鯨の一部始終を見守っていたに違いない」と博氏は推測する。

万次郎は鯨の見張りをしたり、いろいろな手伝いをしているうち片言の英語を覚えた。ホノルルで５人を役人のところに連れて行き、保護してくれるように依頼したホイットフィールド船長。出港しようとしたとき、万次郎を本国に連れて帰り、教育を受けさせようと考えた。万次郎も承諾し乗船。船の中で「ジョン・マン」と親しみを込めて呼ばれ、グアム、タヒチを経て南アメリカ南端のケープホーンを回る。ここで「１８４３年の大彗星」と呼ばれる彗星を目撃。彗星の尾が一方の空から他方の空にまで達していて、万次郎の将来を約束するような光輝く流れ星だった。

ボストン南東約１００キロに位置するマサチューセッツ州のニューベッドフォードに上陸したのは１８４３年５月７日。ニューベッドフォード港には両舷に外輪がある蒸気船が停泊していた。蒸気船を目にした初めての日本人だったかもしれない。

ホイットフィールド船長は万次郎を家から５分くらいのところの公立学校に入れた。日本人留学生の第１号である。ここで万次郎は小学生に交じってＡＢＣから英語を学んだ。別の学校に移った後、翌年からバートレット・アカデミーで学ぶ。同校を終える前の４６年、ジョン・ハウランド号の乗組員だったアイラ・デービスが船長をしているフランクリン号が捕鯨漁に出ることになり、同船長が万次郎を誘った。１９歳になっていた万次郎は「日本に帰れるかもしれない」と期待を胸に捕鯨航海に出た。

フランクリン号は喜望峰を回ってグアムから小笠原島

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

１８５１年のサンフランシスコ・ポーツマススクエア（ウィキペディアより）

に寄港。さらに西に向かい、琉球の小島に船長らとともにボートで上陸。役人らしい者が二人来たが会話が通じず、帰国を果たせなかった。この島を役人は「マンビコシン」と答えたという。博氏は「実在しない」として琉球本島だったとみる。マンビコシンのマンビが摩文仁（マブニ）とゴロが似ていることがその根拠のひとつだ。このときの土地勘が後の帰国につながった、と博氏はみる。

やがて万次郎は副船長に昇格。ホノルルに寄港し、寅右衛門と再会した。すでに重助は病死していた。伝蔵と五右衛門はフロリダⅡ世号で日本に向かっていたが、帰国に失敗しホノルルに戻った。万次郎はホノルル滞在中にこの二人にも会うことができた。ニューベッドフォードに戻ったのは１８４９年９月２３日。３年４カ月の航海だった。

明氏の『中浜万次郎の生涯』によると、この長い航海中に捕獲した鯨は５００頭にのぼり、万次郎が得た分配金は３５０ドルだった。副船長として腕を振るった万次郎としては分配金が少ないように思えるが、この間、航海技術が飛躍的に向上しており、万次郎にとって「捕鯨船は私のエール大学であり、ハーバード大学」だった。（『中濱万次郎』）

この航海中の１９４８年、ロイス船長のスーペリア号がベーリング海峡を越えて北極海にまで入ったことが記録されている（『黒船異聞』）。万次郎はアメリカ捕鯨全盛期の真っただ中にいたわけだ。この年、下院の海軍委員、トーマス・キングが北太平洋に蒸気船を開設すべきだ、との提言書を提出したことはすでにふれた。アメリカにとって太平洋は捕鯨の海から蒸気船による通商の海へと移らんとする胎動期だったが、万次郎といえどもそれには気づいていなかっただろう。

万次郎が航海中の１９４８年１月、サクラメントに近い山中の製材所の水車の流れの中で金が見つかった。これが最初の金の発見と公認された。万次郎がニューベッドフォードに戻ったとき、町中が西部のゴールドラッシュの話でもちきりだった。

万次郎もフォーティーナイナーズの一人になる。４９年１１月、ニューベッドフォードからサンフランシスコに向かうスティグリッツ号に水夫として乗り込み、５０年５月、サンフランシスコに到着。地元紙の報道では、ゴールドラッシュさなかの当時、港に放置された船が５２６隻もあったという。捕鯨船の水夫の多くも稼ぎのよい金山に向かっていたのだ。鯨を捕るより金を掘る方が稼ぎになる。こうした風潮が捕鯨衰退に向かう要因の一つになる。

万次郎はサンフランシスコから川を遡る蒸気船でサクラメントに向かった。このころ川の運輸は蒸気船が主力になっていたのだろう。サクラメントでは汽車が走っていた。客車２３、４両がつながっていて、荷物を上に載

せその下に客が乗っていた。左右に窓が三つあり、ガラスがはめてあって、外を見ても、皆横斜めに走るので見ることができない。非常に速く、「天下ノ一奇物ナリ」と万次郎は表現している。ヒコがボルティモアで気車を見るのはこの４年後だ。

サクラメントから馬を引かせて山に登り、５日目の暮れ、金山に着いた。オランダ人に１日６ドルで雇われたが、３０日働いても賃金をくれなかったため、自力で掘ることに。７０日余りで６００ドルを稼ぎ出し、サンフランシスコに戻った後、船でハワイに向かった。

ホノルルに着いたのは１８５０年１０月。伝蔵（筆之丞から改名）、五右衛門、寅右衛門と再会した。重助は病死していた。大工として生計をたて、妻もいる寅右衛門を除く３人で帰国することになった。そんなある日、港で万次郎を呼びとめる者がいた。伊豆沖で遭難した天寿丸に乗っていた虎吉ら５人だった。この５人はコピア号という船で香港に向かい、万次郎ら３人は琉球を目指すことにした。

万次郎が乗ったサラ・ボイド号は１８５０年１２月、ホノルルを出港。沖縄の南沖を上海に向けて進んだ。５１年２月２日、船は沖縄本島の１２キロのところまで近づき、風が静まったため停船。ボートが降ろされ、万次郎らは乗り移って船を離れた。夜が明けて干潮を待って上陸。摩文仁の海岸だった。

待てど暮らせど来ぬペリー

万次郎がホノルルで伝蔵らと再会を果たし、日本への帰国の策を練っているころ、ヒコが乗り込んで江戸から兵庫に向かっていた栄力丸は、遠州灘に差し掛かったところで暴風に遭った。まるでアメリカから帰らんとする万次郎と入れ替わる形でヒコが漂流する。この二人が我が国の開国に陰に陽にかかわることを思うと、歴史の不思議さに驚きを禁じ得ない。

ヒコの遭難の一件を振り返っておこう。

猛烈な風波に船は翻弄され、まず舵を包む外艫が破壊されて流された。船が沈みはじめたため、水主たちは大麦と小麦各１００俵を海に投げ込む「刎ね荷」を行う。さらにちょんまげのもとどりを切り、ざんぎり頭になった船頭の万蔵の命令で、太さ３尺（９０センチ）の帆柱を切った。帆柱と舵を失った栄力丸は、潮の流れにまかせるしかない。１６０俵の米を積んでいることが救いだった。

翌朝、島影が見えた。島に近づくと無人島のようだった。以前、漂流して八丈島に漂着した経験のある清太郎ら３人が「上陸しよう」と言ったが、「人食い人種がいたら殺される」とおじけづく者もいて、クジで決めることになった。「上陸」「上陸しない」の相反するクジが出て議論をしているうち、船は島から遠ざかってしまった。

船は北西方向に進んだ後、東へ流された。再び刎ね荷をして大豆１００俵、小豆３００俵を捨てた。海は大しけになり、船底から浸水、水かさが１・８メートルにもなった。新造船だった栄力丸が耐えられる限界に近づいていた。

１２月２０日、西の海に船が見えた。布切れを振ると船が気づいた。３本の帆柱を持つ大型船だった。乗組員１７人はオークランド号に救助され、５１年２月、サンフランシスコに着いた。オークランド号は次の航海の準備があるため、ヒコらはポーク号という船に乗り移った。

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

ヒコを支援したサンダース（播磨町郷土資料館編『ヒコの生涯と新聞史』

そこにトーマスという士官がいた。彼は日本にあこがれ、「日本に行きたい」といって日本語を教えてくれるよう日本の水夫に頼み込む。トーマスは一番年少のヒコを気に入り、英語を教えるとともに、ヒコから日本語を教わった。長助と幾松から、異国の言葉を覚えて帰国するときびしい罰を受ける、と言われ、ヒコは英語を教わることをあきらめた。

５２年２月下旬、サンフランシスコ港に軍艦セント・メリー号が投錨した。トーマスがこの船で日本に帰れる、とたどたどしい日本語と仕草でヒコらに伝えた。３月１２日、ヒコら一行にトーマスも加わってセント・メリー号に乗り込み出港、４月３日、ハワイに寄港した。その直前に病死した船頭の万蔵を葬って出港し、５月２２日、マカオに着いた。港内には大型の外輪式蒸気艦サスケハナ号が停泊していて、３日後、ヒコらはサスケハナ号に移った。サスケハナ号はペリー艦隊の旗艦になることが予定されていた。

ヒコらはサスケハナ号で日本に向かい、幕府役人に引き渡されるはずだった。だが、話しは簡単ではなかった。

この４年前、「難破した１５人のアメリカ人水夫が本国送還を待ちわびている」とのニュースがアメリカの東インド艦隊に届いた。情報を集めると、彼らが捕鯨船ラゴダの乗組員で、日本で虐待されているらしい、と思われた。ブレジル号の艦長グリン海軍中佐は長崎港に入って投錨、長崎奉行と交渉したがらちが明かず、「即刻引き渡さねば砲撃も辞さぬ」と恫喝、やっと解放させることができた。ワシントンに戻ったグリン艦長は１８５１年６月、大統領に「日本を開国に踏み切らせる時期がきている。強力な海軍を派遣させるのが得策」との具申をした。（宮永孝『ペリー提督――日本遠征とその生涯』有隣新書）

この具申もあってペリーは５２年３月、東インド艦隊司令長官に就任。ノーフォークをミシシッピー号で出港したのは１１月２４日。ヒコがマカオに着いたときから半年も先だ。ペリーのマカオ到着は５３年４月６日のことである。

ヒコらにすれば、ペリーは待てど暮らせどやってこなかった。

もしヒコらがペリーの到着をじっと待っていれば、ヒコの人生は全く変わっていたはずだ。恐らく歴史に名を残すことなく、故郷で静かに一生を送っただろう。だが、運命のいたずらというべきだろうか。ヒコらがペリーを待つ間、ペリーは軍艦１１隻で日本に向かうらしい、とのうわさが流れた。ペリーは当初、大軍艦編成を構想していたので、このうわさは決してでたらめではない。ヒコらにしてみれば、日本と戦争になれば故国の土を踏めるとは思えない。ペリーがいつ来るのかわからないという焦燥と、先行きへの不安感が渦巻いているころ、トーマスがアメリカに帰るのでヒコも一緒に行こう、と誘った。「仲間と離れられない」とヒコが断ると、トーマスは亀蔵を引きこみ、結局治作も含めた３人がサンフランシスコに戻ることになった。サラー・フーパー号というイギリス商船で１８５２年１０月、香港を出港。５０日後、サンフランシスコに到着。ヒコは税関長のサンダースの家に住み込む。

質素な服装の大統領

５３年７月上旬、ヒコはサンダースに連れられて船でニューヨークに向かった。この１カ月前にペリーが浦賀に到達しことはもちろん知らない。ニューヨークに着くと、サンダースはボルティモアの自分の家族宛てに「あす帰宅する」と電報で知らせた。電報室ではカチャカチャと音がする。サンダースは「２０分くらいで返事がくる」と言った。間もなくホテルの従業員が紙片をサンダースに渡した。「家からの返事だ」とサンダース。ヒコは電報の手紙が鳥より速く飛べるとは、と半信半疑だった。

翌日、蒸気列車でボルティモアに向かった。駅前で義弟が馬車で待っていた。電報通りだ。ヒコはアメリカには恐るべき機械があることを実感した。サンダースの家は妻と二人暮し。３年前、サンフランシスコで銀行を興し、税関長も兼務していたサンダースはロシアに商用に出かけるため税関長を辞任することにし、政府にその願書提出のため今回、帰郷したのだ。

２日後、ヒコはサンダースに連れられ、列車でワシントンに着くと、サンダースは「国家の首長を訪ねる」といった。「何のことかわからなかったが、自分を連れて行きたがったので一番いい服に着替えた」とヒコは回想している。このとき日本人として初めてアメリカの大統領に会うことになるとは夢にも思わなかったのだ。

サンダースとヒコを乗せた馬車は大理石造り２階建ての建物の敷地内に入った。サンダースに付き従って中に入る。奥の大きな部屋で４０歳くらいの紳士が一人書きものをしていた。色白のやせ形。サンダースはこの紳士と握手を交わし、「日本人。カリフォルニアから連れてきた」とヒコを紹介した。紳士は「やあいらっしゃい」と言ってヒコの手を握り、そばの椅子に腰をかけるよう勧めた。ヒコは遠慮した。

ヒコは大統領とサンダースが会話をしている間、「国

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

ピアース大統領（播磨町郷土資料館編『ヒコの生涯と新聞史』より）

家の首長とはどういうことだろう」と思案をめぐらした。

『アメリカ彦像自伝』の中で「ただ家が大きくて鉄の柵もあるがそれだけではないか。壮麗な門がまえもないし、護衛の兵隊もいない。あの男の服装も質素な黒色だ。この人が国家の最高の人というのはどういうことだろう」と、その時に感じた不思議な思いを表している。むりもない。播州にいれば、庄屋に会えるのが精いっぱいなのだ。実際、このとき「私の国では、どんな小さなところの役人でも、かっこうはこの人よりも尊大でりっぱだ」と首をひねるのだ。

馬車に戻ったとき、「いま話していたのはどういう人か」と尋ねると、サンダースは「プレジデントと呼ばれ、日本の皇帝にあたる人」と答えた。それでもヒコは「アメリカの主人があんな簡素な生活をしているはずがない」と信じなかった。

だがまぎれもなく第１４代大統領フランクリン・ピアースだった。日本人がアメリカの大統領に会う歴史的瞬間だったとは思いもしないヒコは後述するように、この４年後、二人目の大統領に会う。

さてボルティモアに戻ったヒコ。カトリック系の学校に通い始め、サンダース夫人の勧めで洗礼を受ける。ジョセフ・ヒコは洗礼名である。サンダースが経営する銀行が金融恐慌で倒産し、ヒコに学費を出せなくなったため、ヒコは学校をやめざるを得なくなる。サンフランシスコの商社で働いていた１８５７年８月、サンダースのところに上院議員グウィンからの１通の手紙が届いた。ヒコを国務省に雇ってもらえるようにしようと思う、としたためてあった。

１１月、グウィンはヒコを連れて国務省におもむいた後、ホワイトハウスに向かった。執務室に入ると、ブキャナン大統領にヒコを紹介した。グウィンは「日本は間

もなく開国する。ヒコが国務省に職を得られれば、両国にとって役立つだろう」と、大統領の助力を願い出た。大統領は「国務省に空席があれば任命しよう」と答えたが、結局この話は沙汰やみになった。

５８年９月、サンフランシスコに測量船フェニモア・クーパー号が入港。同号に乗船できるという思いがけない話がヒコに飛びこんだ。同号は東洋に遠征する、というのだった。

『忘れられた黒船』によると、同号は北太平洋測量艦隊の５隻の一つ。司令長官リンゴールドは測量、ペリーは日本に対する外交と役割分担されていて、リンゴールとペリーは補完関係だったと著者の後藤敦史氏はみる。リンゴールドという人物については日本ではほとんど知られていないが、二人は飛車角の関係だったといえるかもしれない。この年の３月にペリーは亡くなっているので、二人の関係は終わっているが、ヒコにはどこかペリーの影がおおっているのだ。

ヒコはもちろんそんなことは関知しない。「今度こそ日本に帰れる」と素直に喜んだことは想像に難くない。すでにヒコはアメリカ国籍をとっていた。キリシタン禁制という日本の国是に不安を覚えたサンダースの「アメリカ人になれば日本の土を踏んでも問題は起こらない」との進言にしたがったのだった。こうしてヒコはアメリカ人書記として測量船に乗り込んだ。

サンフランシスコをたったフェニモア・クーパー号はホノルルに寄港。ここでヒコは政吉に会った。「ティム」と呼ばれていた。淡路島出身の政吉が乗った住吉丸はミカンを積んで紀州から伊勢に向かう途中、大しけに遭って漂流し、２人が死亡。政吉も餓死寸前、アメリカの捕鯨船に助けられた。ヒコは調査船の乗り組みを政吉に代わり、自らはハワイにとどまったあと、香港に向かった。

このころハリスが上海で静養していた。１８５５年に初の日本総領事に任命され、その翌年に下田条約を締結、さらに江戸で日米通商条約を締結させた外交官である。そのハリスが日本総領事から弁理公使に昇進し、ミシシッピー号で近く日本に向かうことになった。ヒコにとってこの上なく幸運なことに、艦長が日本に送るよう計らってくれた。ミシシッピー号はペリーが引き連れた黒船のなかの一隻で、ペリーがメキシコ戦争以来最も愛着をもっていた蒸気船だ。ここでもペリーの影がヒコにつきまとう。ヒコがミシシッピー号にハリスを訪ねると、神奈川領事に就任するドールがいた。「領事館付きの通訳にならないか」とドール。ハリスと相談し、引き受けることにした。

ミシシッピー号は長崎、下田を経て５月、神奈川沖に投錨し、ヒコは横浜に上陸。９年ぶりに故国に足を踏み入れたのだった。

咸臨丸での出会い

話を万次郎に戻そう。沖縄本島最南端の摩文仁の番所役人に簡単な調べを受けた後、翁長（豊見城市）で薩摩藩の取り調べを受け、さらに薩摩に送られた。藩主になったばかりの島津斉彬は積極的に西洋の文化を取り入れ、富国強兵に力を入れていた。すでに沖縄で藩としての取り調べが終わっていたことから、外国の状況聴取に重点が置かれていたとみられ、斉彬は万次郎を呼んでアメリカ事情を聴いたという。藩の軍賦役田中清左衛門、田原直助と船大工３人が万次郎から航海術や造船を学

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

咸臨丸（ウィキペディアより）

び、田原らは「雲行丸」建造した。船首に三角の帆をもった我が国最初の蒸気船だ。越通（おっと）船と呼ばれた。

だが、万次郎が長崎に送られると、帰国できたほとんどの漂流民同様まず揚げ屋（牢）に入れられ、踏み絵をさせられた後、白州で奉行直々の取り調べを受けることになった。査問は１８回にわたり、長崎奉行、牧志摩守は「万次郎は頗る怜悧にして国家の用となるべきものなり」との意見をつけてこの顛末を幕府に報告。万次郎は放免された。

万次郎が高知に着いたのは１８５２年８月１５日。１１月１６日、中ノ浜に向かい母親と会う。３日後、高知城下の教授館に出仕、翌年１月、土佐藩に登用されて武士になった。

ペリー来航が万次郎を大きく変えた。ペリーが浦賀を去って８日後、幕府が万次郎を江戸に呼びだすことにしたのだ。儒学者の大槻磐渓が「天文、測量、砲術まで習得して帰っており、アメリカ事情に通じている。今後アメリカ人渡来のときに役立つだろう」といった内容の意見書を林大学頭に提出、林が老中阿部正弘に推薦したのだ。

万次郎が江戸に着くとさっそく老中に召しだされ、海外事情を説明。阿部正弘は万次郎を幕府直参の御普請役にした。

万次郎が阿部正弘に召しだされた席にいた勘定奉行川路聖謨はその後、何度も万次郎に会ってアメリカの様子を聞き、その内容を「糾問書」として記録した。それによると、大政を掌る大統領職は国中の人民が入札で登職し、在職４年で交代する、と大統領制について説明。西側のカリフォルニアは日本に対している、としたうえで、ワシントンへは、陸地通行で４カ月、船路の場合は南アメリカを回るので７、８カ月かかると述べ、「日本はワシントンより近い」と日本の地理的な位置について言及。さらに「日本との親睦はアメリカ積年の宿願」としたうえで、開国を要求する理由として、「中国と往来する蒸気船は石炭を多く使うので途中で不足を補わねばならない。日本近辺に石炭置き場があれば便利なので、石炭の補給と地所の借り受けを希望しているとアメリカ滞在中に聞いた」と語っている。

ペリーが１８５４年２月１１日に浦賀に再来した際、ペリーとの交渉役に任じられたのは川路とともに万次郎召しだしの場にいた伊豆韮山代官江川太郎左衛門。江川はペリーとの条約交渉の通訳を万次郎にさせるつもりでいた。しかし幕府海防参与で攘夷派の水戸斉昭は「万次郎は一命を救われた以上、アメリカに不利になることは決して好むまい」として通訳とすることに反対。江川に「こちらの秘密の会議などはいっさい知らせない方がよい」とまで書簡にしたためた。こうした水戸斉昭の強硬

な姿勢に阻まれ、万次郎はペリーに会うことはできなかった。

ペリー側に日本語に精通した通訳はいず、幕府側はオランダ語通詞しかいなかった。このため英語からオランダ語にさらに日本語に､と不便な交渉を行うことになり、さまざまな行き違いが起きた。万次郎という格好の人材を有効に使えなかったところに、攘夷論を無視できない幕府のかじ取りの難しさがうかがえる。こうしたなか、林大学頭が全権となり５４年３月３１日、日米和親条約締結にこぎつけた。要するに万次郎が桧舞台に立つことはなかったのだ。

和親条約が成るとアメリカにとっての課題は通商条約の締結だった。その任を帯びたハリスがミシシッピー号で横浜にやってきたとき、ヒコが同船していたことはすでに述べた。１８５８年７月２９日、ポーハタン号上の甲板で下田奉行井上清直、海防掛目付岩瀬忠震とハリスの間で日米修好通商条約が調印された。その条約批准書交換のため日本側の使節がポーハタン号でアメリカに向かうことになり、咸臨丸が随行することになった。

咸臨丸は幕府海軍練習を兼ねて派遣されるもので、軍艦操練所教授方頭取の勝海舟が先任士官となり、万次郎が通訳として乗り込むことになった。

こうした折り、アメリカの測量船フェニモア・クーパー号が横浜で座礁し沈没、ブルック艦長以下乗組員２１人がアメリカに帰る便船を待っていた。同号はヒコがサンフランシスコからハワイまで乗った船だ。領事館付きの通訳になっていたヒコは横浜滞在中のブルック艦長の世話をしていた。幕府は同号の乗組員を咸臨丸で帰国させることに決定。ブルック大尉はその水先案内を務めることになった。そこでヒコは神奈川奉行からの要請でブルックを咸臨丸に案内。咸臨丸に着くと、奉行の竹本図書頭正雅が応対に出て、ブルックに水先案内を引き受けてくれたことに感謝の言葉を述べ、白鞘の刀と刺繍入りの５枚の絹布を贈った。ヒコが通訳したのはいうまでもない。

翌日、ヒコはブルックと別れのあいさつをした。このとき勝とともに万次郎を紹介された。万次郎はヒコのことを聞き知っていて、「私と同じように漂流の憂き目に遭った者同士。お互い国のために働きましょう」と言った、と吉村昭は『アメリカ彦像』（新潮文庫）のなかで推察している｡実際の二人の会話はどうだったのだろう。

ブルックは『横浜日記』のなかで、「ヒコは親切に同行してくれた。万次郎はヒコに３０分くらい残って話し合いたいといった。彼（ヒコ）は残ったので私はその間待っていた」と書きとめている（『中濱万次郎』）。ヒコと万次郎は３０分間話し合ったというのだ。アメリカの思い出を語り合うには余りにも時間がなさすぎる。何を話したのか、ヒコも万次郎も記録を残していない。

咸臨丸出港の３日後、遣米使節団一行７７人を乗せたポーハタン号が横浜をたった。１８６０年3月２９日、ポーハタン号は咸臨丸に１２日後れてサンフランシスコに着く。地元新聞に「ポーハタン号には２、３の通訳がいたが万次郎に及ぶ者はなかった」という記事が載った。咸臨丸はドックに入ることになり、万次郎は乗組員と別れてワシントンに向かった。咸臨丸がサンフランシスコを出発しホノルルに向かったのは５月８日。このときまでに万次郎はサンフランシスコに戻り、乗船している。

遣米使節団はワシントンでブキャナン大統領に謁見した。大統領はヒコという日本人と会ったことを正使の新見豊前守に語ったかどうか。もし話題に上ったなら、大

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

灯台見回り船「こううん」が入港する兵庫港

統領が名もない漂流民に直接会ったとは、と仰天しただろう。一行はアメリカ軍艦ナイアガラ号で帰国の途につき、１８６０年１１月９日、横浜沖に投錨した。ヒコは領事館書記バン・リードとともにはしけで同号に向かい新見と副使の村垣範正に会った。リードはドール領事の代理として無事帰着を祝う言葉を述べ､ヒコが通訳した。新見は「アメリカのいたる所で歓迎されたと領事に伝えてほしい」と述べた。

遣米使節がアメリカでけなげなほどに親善に尽くし、咸臨丸では日本の乗組員とアメリカの乗組員が交流した。このことは、開国というううねりに新たな風を吹き込むかにみえた。だが遣米使節団がサンフランシスコに上陸する直前、驚愕すべき事件が起きた。日米修好通商条約の調印に踏み切った大老井伊直弼が桜田門外で水戸浪士一行に暗殺されたのだ。以降、攘夷の暴風が江戸と京都を中心に吹き荒れる。日本人でありながらキリスト教徒のアメリカ人になり、しかもアメリカ領事館の通訳であるという、攘夷派にとって許しがたい人間となったヒコの身に危険が迫る。

洗礼を受け、かつアメリカ国籍をとったことがよかったのかどうか。万次郎以上にヒコは波乱の道を歩むことになる。

兵庫湊と神戸港

昨年１２月下旬、私はヒコが彦蔵として乗り込んだ樽廻船「住吉丸」が出航した兵庫の湊を訪ねた。ヒコは１９５０年９月（旧暦）兵庫湊で江戸に向かう廻船、住吉丸に乗船し、熊野で知り合いが乗っていた「栄力丸」に乗り換えたのだ。

神戸の中心地、三宮から西に約６キロのところで和田岬が大阪湾に突き出ている。ここに勝海舟の設計で１８６４年に完成した和田岬砲台があるが、現在は三菱重工神戸造船所の敷地内になっている。同造船所の前を東に２０分ほど歩くと「兵庫埠頭」の標識。兵庫湊はこの辺りだったのだろうかと見回しても、一帯は海の埋め立てでできた工場地帯。昔の湊の面影はどこにもない。困り果てていると、道端に観光マップの看板があった。丁寧に見ると「高田屋嘉兵衛顕彰碑」の文字が見つかった。

私はちょうど高田屋嘉兵衛（１７６９～１８２７年）の生涯を描いた司馬遼太郎の長編小説『菜の花の沖』を読んでいるところだった。私は、過去に２度この本を読んでいる。松前で幽囚されたロシアのゴローニン少佐救出劇が物語のクライマックスだ。私はここ５、６年、北前船ゆかりの港をたずねているので、３回目の今回は、高田屋嘉兵衛がどのように北前船の船持ち船頭として成長していったかに関心をもって読み進めていた。顕彰碑

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

ヒコの英文が刻まれた能福寺の石碑

があるということは、そこが嘉兵衛の北前船が出入りした湊だった所と察した。「高田屋嘉兵衛顕彰碑」は和田岬から東に約２キロの古い商店が立ち並ぶ一角、竹尾稲荷神社の敷地の端にひっそりと建っている。この神社から数分のところが兵庫港である。住所は神戸市長田区西出町。三方にクレーンが立ち、高層ビルや倉庫などに囲まれたごみごみとした港だ。岸壁に立つと、海上保安庁の灯台見回り船「こううん」が港に入ろうとしているところだった。全長２３メートル、５０トンの船だ。千石船は全長２９メートル、１５０トンくらいなので、ヒコが乗った「住吉丸」はこの「こううん」より二回りくらい大きかっただろう。

江戸時代の兵庫湊を想像しようにも、余りにも変わり果てている。司馬は「兵庫の湊は深いのだが、海底のある部分に洲があって、毎年三月、潮が沖へ退いてしまう季節になると、海面上にあらわれるという」と『菜の花の沖』に書いている。ヒコが船出したのは秋だから洲は現れなかっただろう。あるいは洲がでない時期を選んでの出航だったのだろうか。人口は約２万人。主な廻船問屋が十数軒あり、当時としては大いににぎわった港だが、今からみれば何とものどかだった。

兵庫港から十数分先の能福寺に向かった。この寺の境内に、神戸事件の下手人とされた滝善三郎の顕彰碑があり、２年前に訪ねている。神戸事件は１８６８年２月、三宮神社前を備前藩の隊列が通りかかった際、神戸開港にともなって居留地にいたフランス人水兵が横切った事件。滝が制止しようとして水兵に傷を負わせたことから銃撃戦に発展、外交問題となり、新政府は滝を切腹させることで決着をはかった。その滝の顕彰碑がある能福寺に英文で書かれたヒコの碑があるというのだ。

同寺は明治初年に建立された高さ１１メートルの大仏があり、「兵庫大仏」といわれている。ヒコの碑は大仏の１０メートル先にあった。高さ約２メートル。漢字の碑文の上に英文が刻まれている。案内板には「外人客が神戸のマスコットである兵庫大仏に多数参拝に来たところから、１８９２（明治２５）年、十九世住職がヒコに寺の縁起を英文で書くよう依頼した」とある。

ヒコは神戸事件翌年の１８６９年、神戸に永代借地権を得、７７年、神戸市郊外の東明村（神戸市東灘区の御影地域）に鋹子夫人と暮した。そこは灘五郷に近い。住吉丸が積んでいた灘の酒はヒコの生涯の忘れ得ぬものに

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

なっていたのだろうか。８９年、ヒコは東京に移り住んだが、兵庫港に近い能福寺からの頼みには断れなかったのだろう。

　重複するようで恐縮だが、ヒコが兵庫湊をたったのは明治維新の１８年前。北前船や樽廻船が出入りする鎖国の中の和船だけの世界だった。ヒコの英文碑が建てられた１８９２年、勅令で現在の神戸市役所前のフラワーロードの河口から和田岬までを神戸港と位置づけられた。開港以前の兵庫湊から開港後の神戸港へ。それは彦蔵からヒコになった彼の人生そのものといえなくもない。

　私は今回、兵庫湊を出てアメリカに行き、日本に戻るまでのヒコを、万次郎をからめてたどった。それはどんな時代だったのだろう。私は神戸の街を歩きながら、整理してみた。

　ヒコが乗った栄力丸をはじめ数多くの廻船が太平洋沖で遭難した。それは江戸経済が成長し、もはや鎖国体制の限界にきていたということだろう。その太平洋の対岸のカリフォルニアがアメリカの領土となったうえ、ゴールドラッシュがわきあがったことによってサンフランシスコが急激に発展、太平洋への拠点の港になる可能性をもつに至った。時あたかも、アメリカにとって最大の捕鯨場だった太平洋は、蒸気船によって東洋に進出する輝ける海になろうとしていた。

　私は本稿のタイトルを当初「遭難の先のアメリカ」としていたが、以上のように思いをめぐらした結果、「ペリー来航前夜の太平洋」に変えた。太平洋にかかわるいくつかの波が重なって大きなうねりとなり、鎖国の防波堤を越えてこの国に幕末という渦巻き状態を引き起こした、といえるのではないだろうか。このうねりにヒコはのまれ、まるで笹舟のように翻弄されながら必死に生きようとした。

　先が見えないヒコの人生行路。時に思いもかけないことが起こる。その一つはリンカーン大統領に会ったことだ。次回、その意味を考えてみたい。

明治150年企画

ジョセフ・ヒコの幕末維新②

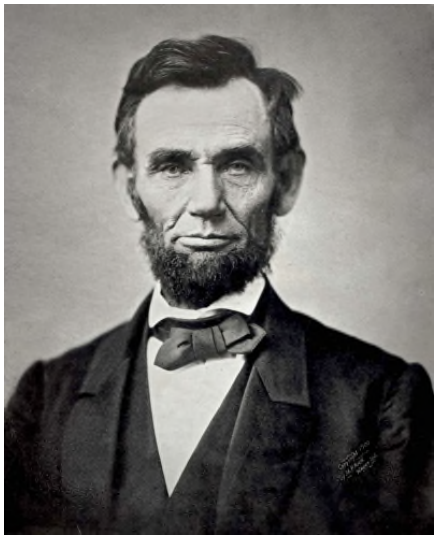
井上脩身

リンカーン編

電信が変えた戦争の形

写真は特に記載なき場合はウイキペディアより

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新



江戸時代の終わりごろ太平洋上で漂流し、救われてアメリカに渡った後、数奇な運命をたどったジョセフ・ヒコ。彼を語るうえで避けて通れないのはリンカーン大統領に直接会ったことだ。奴隷解放宣言をしたことで世界史に名をとどめ、歴代アメリカ大統領の評価として第１位にランクされるこの大統領に会ったただ一人の日本人なのである。だがヒコがリンカーンの事績を認識していた気配はない。私はヒコの目で幕末維新をとらえようとしているが、リンカーン大統領が幕末維新になんらかの影響を及ぼしたといえるだろうか。

私は『彦蔵漂流記』（海外渡航記叢書４所収、雄松堂）のページを何度も繰った。二つの図版に目を留めた。１点は蒸気機関車と電信線を組みにして描かれた図、他の１点は合戦図だ。前者の図で、なぜ列車と電信がワンセットなのだろうと考えていて、ペリーが横浜で日米和親条約（１８５４年）を結んだとき、幕府に４分の１の大きさの蒸気機関車とモールス電信機を贈ったことが頭に浮かんだ。ペリーはアメリカの近代化の象徴として、この二つをあえて日本に見せつけたに相違ない。では合戦図は何を意味するのか。ヒコは南北戦争に遭遇している。アメリカを二分したこの戦争はリンカーンが大統領に就任するとともに勃発し、北軍勝利に終わった直後に暗殺されている。

私の頭の中でヒコがかいた二つの図が重なった。リンカーン大統領は北軍（合衆国軍）を有利に展開させるために鉄道と電信を駆使したのではないのか。もしそうであるなら、結果として明治維新後の戦争のモデルになったのではないか。歴史には門外漢の私だが、自分なりに検証してみようと思った。

写真：リンカーン大統領

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

ペリーの贈り物

　ペリーが幕府に贈った蒸気機関車と電信機について、ペリー側の資料である『ペリー提督日本遠征記』（宮崎壽子監訳、角川ソフィア文庫）でみてみよう。「日本の労働者たちは悪天候から荷を守るため小屋を建て、小型機関車の円周軌道を敷設するため平坦な土地を選定し、電線をはるため柱を持ってきて立ててくれた」と記録している。幕府役人は蒸気機関車と電信機に強く関心をもち、その設置の支援、協力を惜しまなかったのだ。

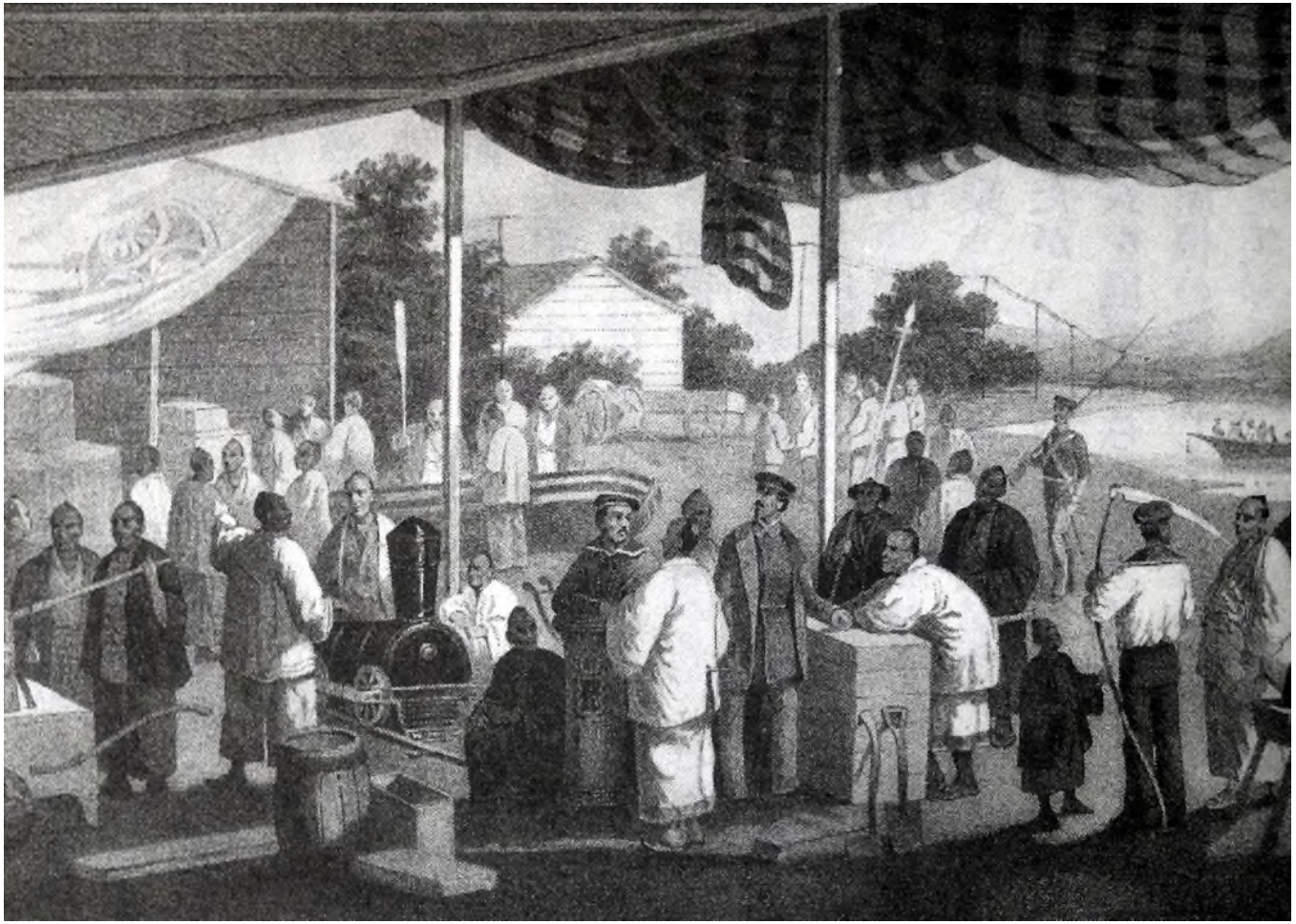
　まず蒸気機関車。「小型蒸気機関車、客車、炭水車をそろえた鉄道も、（役人の）興味をそそる点ではひけをとらなかった」という。「客車はきわめて細工を凝らしたものだったが、小さいので六歳の子供を乗せるのがやっとだった」にもかかわらず「日本人はなんとしても乗ってみないと気がすまず（略）屋根の上にまたがった」。「威儀を正した大官が、丸い軌道の上を時速２０マイル（約３２キロ）の速度で、ゆったりと長衣を風でひらひらさせながらぐるぐる回っている姿は少なからず滑稽な見もの」だった。そして「屋根の縁をしっかりつかんで必死にしがみつき、あまりのおもしろさに歯をむきだして笑ったり、かがめた身体をひきつるように震わせて、臆病笑いを浮かべたりしている役人を乗せて、汽車が円周軌道を突進するのを見ていると、この汽車が動くのは、煙を吐きながら苦もなく作動している機関車の力というよりは、苦闘する大官の馬鹿力のせいではないかと思えてくる」とつづっている。

　遊園地の子供用のような機関車に乗ってはしゃぐ幕府役人を小馬鹿にしたレポートだ。ペリー艦隊がいかに日本を見下していたかを示している。このような態度では攘夷の嵐が巻き起こり、幕府を腰ぬけとなじる声がわっとわき上がったのも当然であろう。だが、初めて遊園地で小型列車に乗って歓声をあげた幼少時を思い出せば、幕府役人の気持ちもわからないではない。西洋文明から閉ざされていた幕末日本の笑うに笑えない現実であった。

　一方、電信機。「（米側の技師の）指導で電信装置が間もなく稼働するようになり、電線が１マイル（約１・６キロ）ほどまっしぐらに張り渡され、その一端は条約館に、他の一端はとくにこの目的のために設けられた建物にあった」。そして両端にいる技術者の間で通信が開始されると、「日本人は強烈な好奇心をもって操作法に注目し、一瞬のうちに伝言が英語、オランダ語、日本語で建物から建物に伝わるのを見て、びっくり仰天した。毎日毎日、役人や大勢の人々が集まってきて、技手に電信機を動かしてくれるよう熱心に頼み、伝言の発信と受信を飽くことなく注視していた」。

写真　ヒコが描いた「蒸気車とテレグラフ」（『漂流記餘話』より）

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新



ペリーから贈られた小型蒸気機関車と電信（遠くに電信線が見える）（『ペリー提督日本遠征記』より）

ここで蒸気機関車と電信機の誕生からペリーが来航する１９世紀半ばまでのアメリカでの沿革にふれておきたい。

蒸気機関車は１８０２年、リチャード・トレビシックが台車に蒸気機関を載せてつくったのが始まりとされている。１８１４年、ジョージ・スチーブンソンが実用的な蒸気機関車を製作、時速６・４キロで上り坂を３０トンの石炭を運ぶことに成功。翌年、アメリカ・ニュージャージー州のジョン・スチーブンスが蒸気鉄道の導入を提唱し、１８２５年、自宅の庭に線路を敷き、自作の蒸気機関車を時速１９キロで走らせた。これがアメリカで最初に走った蒸気機関車だ。これを機にアメリカでも鉄道への関心が高まり、１８５０年ころにはニューイングランド約４１５０キロ、大西洋岸北部約４３５０キロ、五大湖周辺東部１６３０キロなど、アメリカ北部を中心

電信機については、蒸気機関車と接した役人の無邪気さとは違って、知的好奇心を最大限働かせたようだ。この好奇心がやがて産業発展の導火線になる。

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

に鉄道が敷設され、総延長は約１万３７００キロにのぼった。

鉄道に比べて電信は歴史が新しく、１８３７年にモールスが電信機を発明。４４年にモールス符号を発表し、ワシントン―ボルティモア間６４キロの間で電信線がはられた。同年５月、初めて通信に成功。そのときのメッセージは「神は何を為し給いしか」だったという。

中野明氏は『サムライ、ＩＴに遭う――幕末通信事始』（ＮＴＴ出版）の中で、モールスが開発した電信方式を細かく検証している。いささか専門的になるので紹介は省くが、同書によると電信ネットワークはアメリカ全土に普及、ペリーが２度目に来航した１８５４年には総延長距離は６万６０００キロに及んでいた。中島氏は「ペリーが持ち込んだ電信は、当時、アメリカでサービスされていた電信のコピーを縮小サイズにしたものであろう」と推測する。

では日本側は電信をどう記録していたのだろう。記録をとどめたものに「亜墨理駕船渡来日記」、「亜米利加船渡来日記」「亜美理駕船渡来日記」「神奈川日記（写し）」の四つの史料がある。このうち「亜墨理駕船渡来日記」は、幕府役人の日記を神奈川・石川郷の名主、石川和輔が筆写したもので「石川本」と呼ばれ、以下のように書き留めている。

テレカラフの仕掛けは、応接場の北の方へ５町ほどの所に杉の柱をだいたい２０間間隔で立て、場所の都合により少々西の方へ折れ曲って、あと４町ほど同様の要領で杉を立てた。柱の上にギヤマンの壺を置き、針金をその柱の壺ごとに一つ一つ巻き付けた。柱の最後は洲干弁天前の吉左衛門という人物の庭に、少し太い柱を立てて、その柱の上に針金をとめて、下の方に引き下げてあった。針金の余りは土の中に埋めてあった。座敷に別の仕掛けがあり、仕出し料理やのムカデ台に似たものが置いてあった。ムカデ台の下にギヤマンの壺が七つあって、中に酒の色の水が八分目ほど入っている。壺の口からは細い針金が一つ一つ出ていて、針金の元は土の中から出た針金と結び合わさり、ムカデ台の中央の時計のような物に至っている。（口語約は中野氏）

ペリー艦隊のレポーターがいうように、好奇心あふれる幕府役人は実に細かくメモをした。だが、それぞれのパーツがどのような働きをしているのかはわからなかったに違いない。

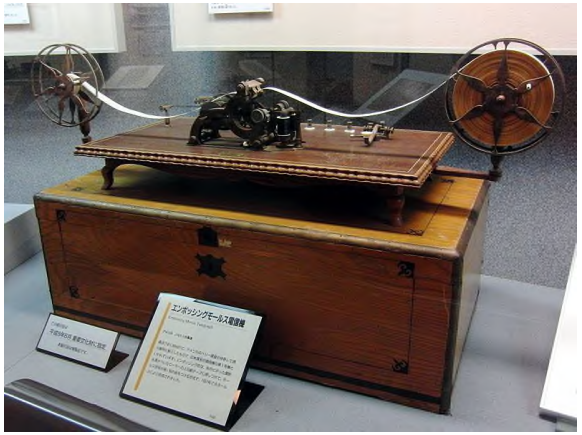
石川本を読み解くとこうだ。応接場（条約館）の９町（約１キロ）の間に２０間（約３６メートル）間隔で杉柱を立て、それぞれのガラス製碍子に電線を巻きつけた。電線の端は地中に埋められた銅板につながっている。ムカデ台のような電池が吉左衛門の座敷におかれていた。

同書によると、条約館側から「ＪＥＤＯ」（江戸）を―・―・（Ｊ）、・（Ｅ）、―・・（Ｄ）、・-（Ｏ）と打電すると、ＹＯＫＯＨＡＭＡ（横浜）と打ち返してきたという。

「アメリカの電信がもつ特徴は、横浜の電信にも色濃く受け継がれていたはず」と中野氏はいう。実際に文明開花のなかでどのように電信が使われたのかは追って考察したい。

さてヒコである。前回（ラピス２０１８春号、ジョセフ・ヒコの幕末維新①＝中浜万次郎編）の中で、ペリーの最初の来航の１カ月後の１９５３年７月、ニューヨー

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新



クのホテルで税関長のサンダースが自宅に電報を打った、と述べた。「２０分くらいで返事がくる」とサンダースがいった通り、間もなく自宅から返事が届き「電報の手紙が鳥より速く飛べるとは」とヒコが驚いたこともふれた。

電信そのものを最初に見た日本人はおそらく中浜万次郎だろう。万次郎が帰国後、土佐で語った話をまとめた『漂客談奇』の中にテレカラーフ（電信）の図が載っているのだ。図には数本の電信柱と電線が描かれ「書状ヲ鍼金（はりがね）ニ付継場々々へ飛ス図」と説明がつけられている（中濱博『中濱万次郎――「アメリカ」を初めて伝えた日本人――』冨山房）。サンフランシスコかその周辺で見た電線を描いたと思われる。

実際に電信を利用しているのを目撃した最初の日本人はヒコであろう。ペリーが電信デモンストレーション（１９５４年３月）をした８カ月前のことだった。

このときの様子を『彦蔵漂流記』には次のように記している。

この旅籠屋（ホテル）の住人はテレカラフを職業としていた。サンダースが私にいうには、この町から自分の生国まで日本の里数でおよそ百里へだたっているが、明日帰宅するということを下の家にゆき道具仕掛けで知らせてやれば、日本の時間の八分時の一で音信が通じ、その返事がくるという。その速やかなことを信じられなかったけれども、共に下の家に行ってみるとしばらくして返事があった。（略）後に究理学を学びかつその仕掛けを見れば、空中のエレキ銅線を伝えれば、やりとりは一瞬の間にできるのである。（略）翌日ブロクフェン（ブルックリン）から蒸気車にのった。蒸気車はすごく早く走るという話はかねて聞いていたが、今日はじめて体験した。（略）蒸気車の内に乗っていて近い田畑で耕作している農民などを見ていると、飛ぶ鳥のようで、はっきりと見とどけることができないけれども、車の動揺ははげしくなく少しの書き物ならできる程であった。

鳥より速く伝わる電信と飛ぶ鳥のような蒸気機関車。ヒコが鉄道と電信をワンセットで図にしようと考えた理由が以上で了解できるだろう。ヒコにとってこの二つはアメリカで遭遇した異文化の象徴だったのだ。

では、その図にヒコは何をかいたのだろう。以下は『漂流記』の中の「蒸気車・テレグラフ図」である。

蒸気車図は貨車を蒸気機関車が黒い煙を吐いて牽引している様子を描いたものだ。貨車の屋根には十人ほどの人たちが立ちあがって手を振っている。「蒸気車は旅人の荷物をたくさん積み込み、人を乗せて極めて速く走らせば、一ツ時（２時間）に６０里行くというが、そのようにすれば事故があるため政府は２５里を限度と定めている」との説明がついている。

写真：ペリーから贈られたエンボッシングモールス電信機

一方テレグラフの図では電信柱にはられた２本の電線が描かれている。電線の下では馬に乗った男たちが何かの指示をしているように見える。「鋼（銅線）を引くときは、テレグラフの銅線をこちらの言葉をどこへでも伝える。その速やかなことは、一ツ時に５、６０里の遠くに達する」と注釈を加えている。文法的誤りや誤字がある文章だが、図は電線を引いている様子を表しているようだ。

第一次世界大戦の先駆

『彦蔵漂流記』にみえる合戦図はどのような戦いを表しているのだろうか。図には「予一度メキシコと亜国の合戦を遠望――」との注釈をつけて「米西戦争図の説明」としている。アメリカとスペインの間のいわゆる米西戦争は１８９８年に起きた戦争だ。ヒコはこの前年に亡くなっており、遠望できるはずはない。では注釈通り、アメリカがメキシコと戦ったいわゆる米墨戦争か、となるとそれも否定せざるを得ない。同戦争が起きた１８４６～４８年はヒコが９～１１歳のときだ。生地の播州にいた。では、この合戦はいつどこで目撃したのだろうか。

注釈ではヒコは次のように記している。（口語訳は同書より）

私は一度メキシコとアメリカの合戦を遠望し、また大砲を打ち合う軍艦の中にいたことがある。戦を始める前、兵卒の顔色は土のようになり、一度大砲を発すると顔色はなおり、勢いが猛くなって恐怖の色はなくなる。その場におれば、われを忘れて弾丸をはこぶ心になり、日頃思っているほど恐ろしいものではない。しかし国のための合戦ほど悪いものはない。一度敗北すると国力はよわまり、人一代では元に復することは困難である。また勝った方も人命を損じ、宝を費やし、末代までも怨みをのこすのである。

ヒコが最初にサンフランシスコに上陸したのは１８５１年。５２年に帰国のために香港に向かった後、同年に再び渡米。５８年に日本に帰国し、６１年、三度目の渡米をし、翌年帰国している。この間、アメリカで行われた戦争は１８６１～６５年の南北戦争しか見当たらない。あるいはメキシコとの戦争の終結後も小競り合いがあったのかもしれないが、メキシコとの国境線付近にヒコが行ったという記録はない。ヒコの注釈通り、合戦の様子を軍艦の中から遠望したのであれば、この合戦は海の近くで行われたのであろう。

南北戦争の主たる戦場は中部大西洋岸のバージニア州だ。この海岸沿いに北に進むと、アメリカ滞在中に世話になったサンダースの家があるボルティモアの港に行ける。ヒコが何度かサンダース家に足を運んでいることから、ボルティモアに向かう船の中から南北戦争の一コマを遠望した可能性を否定できない。とはいえ実際に軍艦に乗ったという点に疑問が残る。ヒコがほぼ制海権を握っていた北軍の軍艦に乗れる地位や立場にはなく、ヒコの自伝にもその記述はない。ヒコは米英仏蘭４カ国が長州を攻めたとき、軍艦に乗っている。そのときの記憶と混同している疑いは捨てきれないが、図には十人ほどの騎兵が描かれており、いわゆる四カ国戦争でないことは明らかだ。

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

ヒコが描いた合戦図（『漂流記』より）

という次第で断定はできないが、ここでは南北戦争にしぼってヒコの動向を探ってみたい。

まず南北戦争を概観する。

アメリカは１７８０年の独立戦争後、南部では綿花栽培を中心にプランテーション農業が拡大し、その労働力としての黒人奴隷が独立時の５０万人から１８２０年に１５０万人、１８６０年には４００万人と、８０年間で８倍に増えた。一方、北部では紡績業を中心に産業が発展し、ヨーロッパからの移民労働者が増えた。この結果、都市の人口が急増。サムエル・モリソン著『アメリカの歴史』（集英社文庫）によると、ニューヨーク、フィラデルフィア、ボルティモア、ボストンの人口の合計が１８２０年の３４万人から１８５０年には１１６万人に増えた。ひとことでいうならば、南部では黒人労働者が、北部では一般労働者が急カーブで増えたのだ。

ここで挙げた１８２０年に、「北緯３６度３０分以北の西部地区には奴隷制を認めない」との「ミズーリ妥協」が南北間で成立している。この妥協によって、奴隷制を

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

奴隷解放宣言を起草するリンカーン大統領ら閣僚（『リンカーン』より

合法とする南部の奴隷州と、奴隷制を禁じる北部自由州が並立することとなった。

ところが先にふれたメキシコとの戦争に勝利し、カリフォルニアがアメリカの領土となったため、新しい州にも奴隷制を認めるかどうかをめぐって、南北間で激しく対立するようになった。１８６０年１１月の大統領選で奴隷制の拡大に反対していたエイブラハム・リンカーンが当選したことから、南部は態度を硬化。１２月にサウスカロライナ州が合衆国からの脱退を宣言したのを皮切りに、ミシシッピ州、フロリダ州、アラバマ州、ジョージア州、ルイジアナ州、テキサス州が脱退を決め、この７州でアメリカ連合国を結成。首都をアラバマ州のモンゴメリーに置き、ジェファーソン・デイヴィスが大統領になった。

６１年３月４日、リンカーンが合衆国大統領に就任すると、４月１２日、南軍が合衆国のサムター要塞（サウスカロライナ州チャールストン）を砲撃して戦端が開かれ、バージニア州、アーカンソー州、テネシー州、ノースカロライナ州も連合国に合流。連合国の首都はバージニア州のリッチモンドに移された。一方、奴隷州の中のデラウェア州、ケンタッキー州、メリーランド州、ミズーリ州、バージニア州西部（後に独立してウェストバージニア州）は合衆国に残り、国を二分する内戦の様相となった。

合衆国の首都ワシントンと南部の首都リッチモンドは１６０キロしか離れていず、この間で南北両軍が激突した。北軍は早期決着を図って６１年７月、７万５０００人を動員してバージニアに侵攻(第一次ブルランの戦い)した。前掲の『アメリカの歴史』によると、新式の円錐形ミニエ式銃弾が使用され、北軍だけも８０種類以上の小銃が用いられるなど、火力はメキシコ戦争当時の２倍になった。

この戦いで南軍が激しく抵抗し、北軍の作戦は頓挫、長期戦が必至となった。１８６２年３月、北軍司令官マクレランが率いる１１万人のポトマック軍がリッチモンド南東に上陸してリッチモンドに肉薄（七日間の戦い)。南軍の北バージニア軍は２万６００人の死傷者が出たが、北軍も１万５８００人が死傷。結局北軍は退却を余儀なくされた。この戦いに並行して行われたバージニア侵攻（第二次ブルランの戦い）でも、南軍を統率するリー将軍の巧妙な作戦の前で北軍は敗北。メリーランドへの侵攻（アンティータムの戦い）でも後退するはめに陥った。

こうしたなか、リンカーンは６２年９月、奴隷解放予

奴隷解放宣言をするリンカーン大統領（『リンカーン』より）

備布告を発布した。「１８６３年１月１日に、合衆国に謀反の状態にある州のすべての奴隷が永久に自由を与えられる」というものだ。「この布告はアメリカの歴史の上で、他のいかなる出来事にも見られないほど革命的な人間関係を作りだすもの」とサムエル・モリソンは高く評価している。リンカーンは以降奴隷解放に対する戦いであることを大義名分に掲げた。

南軍のリー将軍はひるまず１８６３年７月、北部侵攻に打ってでた。ボルティモア北西のゲティスバーグで、北軍の中央を突破する死闘を繰り広げたが、総じて北軍が優勢に展開した。同年１１月１９日、リンカーンはゲティスバーグの戦場につくられた国有墓地でゲティスバーグ演説として後世に名を残す演説を行った。「われわれの前に残された大事業」は「これら戦死者の死をむだに終わらしめさせないように、われらがここで堅く決心するため、またこの国家をして、神のもとに、新しく自由の誕生をなさしめるため、そして人民の、人民による、人民のための政治を地上から絶滅させないためであります」（高木八尺、斎藤光訳『リンカーン演説集』岩波文庫）と高らかにうたいあげた。それほどにゲティスバーグではおびただしい戦死者が生みだされたのだ。

以上は東部戦線といわれる戦いである。これに対しアメリカ東部を南北に貫くアパラチア山脈以西の戦いを西部戦線という。１８６１年８月、ミズーリ州スプリングフィールドの北軍と南軍側のミズーリ州兵との間の戦いで南軍側が勝利したものの、６２年２月、テネシー州ドネルソン砦の戦いで南軍の大部隊が降服。４月、同州シャイローの戦いで再び北軍が勝利し、ミシシッピ川の要衝の都市メンフィスを占領。ささらに軍艦によるメキシコ湾からの侵攻でルイジアナ州のニューオーリンズを陥落させた。ミシシッピ川では東西の交通の要で、難攻不落といわれたビックスバーグ要塞（ミシシッピ州）を南軍が確保していたが、北軍は６２年５月から７月にかけての血みどろの戦いのすえ、同要塞を攻略。同年１１月、テネシー州チャタヌーガの戦いに勝利した。

１８６４年３月、北軍の総指令官にグラントが就任。その指揮権を引き継いだシャーマンが５月、ジョージア州のアトランタを、６５年２月にはサウスカロライナ州の海港都市チャールストンをそれぞれ陥落させた。同年３月、北軍は最後の攻勢としてバージニア州のアポマトックス方面作戦を展開。４月３日、南軍はリッチモンドから撤退し、４月９日、リー将軍が降服、南北戦争は事

北軍のキャンプを視察するリンカーン大統領（『リンカーン』より）

実上終了した。

　アトマトックスで行われたグラントとリー両将軍の会見で、グラントは「武器と資材を明け渡す」ことなどの降服の条件を書き記したあと、将校が腰につけている武器の携行を許した。小銃は戦争のための兵器として武装解除の対象だが、ピストルは自己保身の武器だから持つことは認める、ということであろうか。

　動員兵力は北軍１５６万人､南軍は９０万人に及んだ。戦死者は北軍３６万４５１１人。南軍の公式戦死者数はないが司令官報告に１３万３８２１人という数字があることから両軍合わせて５０万人はくだらず、６２万人というデータもある。負傷者は５０万人近くに上る。

ゲティスバーグの戦い（『リンカーン』より）

当時のアメリカの人口は３０００万人といわれ、日本と大きく変わらない。西南戦争の死者が政府軍、西郷軍合わせて１万２０００人だったことに比べると、けた違いに壮絶な戦いであった。

『アメリカの歴史』は重要な新しい戦術的発明として、海軍では装鋼艦と潜水艦、それに浅い海での防衛用の機雷を挙げる。とくに機雷については、これに触れて沈没したり大破した軍艦は４０隻にのぼった。陸上では野戦の塹壕のほか、気球による上空からの偵察などが行われた。同書は「第一次世界大戦の先駆をなした」という。死者６０万人という数字をみると、サムエル・モリソンの分析は大いにうなずける。

もうひとつ見逃せないのは肉親が南北に分かれて争ったことだ。リンカーン大統領夫人メアリーの兄弟３人は南軍に投じて戦死。連合国（南軍）のデーヴィス大統領夫人の親戚に北軍で戦った者がおり、リー将軍のいとこは北軍側の海軍を指揮した。おそらく名もない兵士たちの兄弟では、こうした例は枚挙にいとまがなかっただろう。

まるで保元・平治の乱のような身内の間の骨肉の争い。内戦なればこそであろう。その一方で『アメリカの歴史』が指摘するように、第一次世界大戦の先駆的戦いともいえる近代戦争が展開されたのだから、量的にも血で血を洗う戦いになったのだ。

ヒコがどこかで遠望したならば、「人命を損じ、宝を費やし、末代までも怨みをのこす」戦争という近代史の負の一面を目にしたことになる。

電信駆使の大統領

南北戦争にリンカーン大統領はどのようにかかわったのだろうか。奴隷解放宣言をするような人権派政治家なのだから、戦争を嫌ったにちがいない、と私は思っていた。実際、リンカーンは元はイリニイ州の弁護士。政界に打って出たものの軍事はしろうとだ。だが調べてみるとリンカーンは軍事作戦にのめりこみ、勝利に向けてあくなき執念の火を燃やし続けたという意外な一面が浮かび上がった。

戦争が始まる前、すでに鉄道と電信の延伸がかなり進んでいたことはふれた。どうやら両者は車の両輪のような形で敷設されたようである。モールスがワシントン―ボルティモア間に電信実験をした際、ボルティモア側の受信場所がアメリカ最初の長距離鉄道であるボルティモア・オハイオ鉄道の本社だったことがこのことを象徴的

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

マーガレット・ミッチェル

に示している。

内田義雄氏の『戦争指揮官リンカーン――アメリカ大統領の戦争』（文春新書）によると、当時鉄道は単線であるためたびたび事故が発生。鉄道が延びるに従い、列車が運行通り動いているかどうかの掌握、管理が大きな課題になっていた。ひとつの列車に運行上の支障が起きれば、対向する列車と正面衝突が起きる危険性が高くなるからだ。この対策としてモールス信号による電信が有効とわかり、鉄道会社はただちに採用した。こうして鉄道線路に沿って電信柱が立てられ、電信線が延びた。駅には必ずモールス信号を打てる駅員がいて、列車の到着、出発の連絡をしたという。

南北戦争が始まると、鉄道は部隊や兵器、食糧の輸送手段として利用された。産業が発展しつつあった北部だけでなく南部の軍隊も鉄道を最大限利用した。マーガレット・ミッチェルは名作『風と共に去りぬ』（鴻巣友季子訳、新潮文庫）の中で、アトランタについて「鉄道の便ゆえ商業取り引きの交差点となっていた」とし、「戦場の軍隊に支給する食糧と物資を集積する南部の主要駅のひとつとなって、戦時の需要をこたえていた」と書いている。もし鉄道がなければ南北双方合わせて２４６万人もの兵員の食糧補給は不可能だっただろう。

すべて戦争は司令官と前線の指揮官との通信によって展開されるといって過言でない。南北戦争以前、司令官の伝達は早馬による伝令だった。南北戦争が始まる５年前、マイヤーが昼間は信号旗で、夜間は松明による伝達法を考え、１８５９年、リー大佐（後の南軍の将軍）が採用。陸軍に信号隊が編成された。すでに述べたようにモールス信号による電信線はかなり延びていたにもかかわらず、リーという南軍のエースは有効活用しようとは考えなかったようだ。

これに対し､リンカーンが電信に着目していたことが、２０世紀になって陸軍省電信室で働いていた電信師の回想によって明らかになった。前掲の『戦争指揮官リンカーン』は、コミュニケーションとして当時最先端技術であるモールス電信の効能にリンカーンはいち早く気づいて最大限に利用した、としたうえで「南北戦争にリンカーンがなぜ勝つことができたか。その問いに答える大きな手がかりが、ここにある」という。

以下は同書のエッセンスである。

モールス電信については、政府が金を出さなかったため民間の手によって事業が進められた。１８５６年に設立されたウェスタン・ユニオン電信会社は北部､中西部、西部内陸部に電信網をもち、南北戦争が始まるころには西海岸のサンフランシスコまで電信線を延ばし、大陸横断電信を達成させいていた。おなじころに設立されたサウスウェスタン電信会社はテネシー州、アラバマ州、ルイジアナ州、テキサス州、アーカンソー州など南部や南西部に電信網を広げていた。

いち早くモールス電信を活用したのは新聞社だった。北部には３０００、南部には８００の新聞社があり、合

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

サミュエル・モールス

わせて９００万部余りの発行部数があった。南北戦争が始まると１５０人の記者が戦場特派員として前線で取材し、電信によって記事を送った。

合衆国陸軍省も電信室を設置、民間人である電信士４人を雇用。戦争が激しくなると１２人に増やした。

第一次ブルランの戦いが繰り広げられていた１８６１年７月２１日、リンカーン大統領とシワード国務長官、チェース財務長官ら首脳が電信室に集まり、現地からの電信を待ちうけた。午前１１時半過ぎ、モールス信号のトン・ツー音が鳴った。「午前１１時２５分、重砲及び消火器の発砲激化。マスケット銃の発砲激しさを増す。中尉カーチスより」。同中尉からほとんどリアルタイムに打電される現地情報だった。

このように刻々と電信が入る。「午後２時４５分、戦闘少々遠方へ」「午後３時３５分、十分前戦闘やむ」といったあんばいだ。電信室はホワイトハウスのほど近くにあり、陸軍省長官が管轄していた。以後、リンカーンは足しげく電信室に出向くようになった。

リンカーンは午前１０時から昼過ぎまでホワイトハウスを訪れる一般市民と会うことを日課にしていた。その多くは職探しの陳情だったため嫌気がさし、気分を晴らす意味もあって電信室に入り、机の引き出しからファイルされた電文を一番上から読んだという。

陸海軍総司令官でもあるリンカーンは気晴らしだけで電信室に出入りしたわけではない。北軍のバーニジア軍が南軍に追い詰められた１８６２年８月２７日、大統領が自ら現地のハウプト大佐にあてて「ブルラン川に架かった鉄橋は破壊されたか？」と打電。同大佐から「橋を確保していたが、今は撤退しつつある」と返信してきた。翌日、大統領は同大佐に「反乱軍が予想以上に強大で、彼らは最良の将軍によって指揮されているという情報を貴官はいかにして知ったか？」と尋ねるなど、一将校に対するものとは思えない質問を電信で行っている。

軍司令官のマクレランに対しては１８６２年８月２９日、「全体状況はどうなったか？」と打電。マクレランから「閣下が私に何をしてほしいのか言ってください」と打ち返してきた。マクレランに対しては９月１０日、「今どんな様子か？」、同１５日には「なんとしても反乱軍を撃滅されたい」と指示。１０月２５日には「わが軍の無策ぶりは敵の騎兵部隊を利することになっているのではないか」と痛烈な電信を打ち、怒ったマクレランは「なぜ南軍の騎兵部隊がわが騎兵師団より優秀だというのでしょうか」と返信に憤まんをぶつけている。

ゲティスバーグの戦いでは北軍が優位に立ったことはすでにふれたが、１８６３年７月４日、リンカーンは戦勝報告を陸軍省電信室から全国に向けて発信した。「ポトマック軍からの報告は連邦の大義に偉大な勝利を約束し、多数の勇敢な戦死した兵士にたいして、すべての人が哀悼の意を表すべき勝利の報告だった」というのがその内容だ。この電信を各地の新聞社が受信して報道。戦争史上、そしてメディア史上の画期的な電信になった。

１８６５年４月９日、リンカーンがリッチモンド視察を終えてワシントンに戻るとグラント将軍から「リー将軍降服」の緊急電信が入っていた。

戦争終結後のステーガー電信総監の報告では、軍事用の電信線が毎日１２～１９キロのスピードで延び、総延長は１８６１年末までに１８００キロ、６４年末までに１万４０００キロにのぼった。さらに６２年１月、ワシントンとフォート・モンロー間のチョサピーク湾に１１０キロの海底ケーブルが敷設された。フォート・モンローは南部の首都リッチモンドを海から攻める際の前線基地だ。ワシントンと電信で結ぶことは北軍の戦略上極めて重要だったのだ。この海底ケーブルは後の大西洋横断海底ケーブルのモデルになった。

電信が報道に使われたことはすでにふれたが、ドリス・カーンズ・グッドワイン著『リンカーン』（平岡緑訳、中公文庫）によると、電信自体が報道規制の対象になった。戦争が始まって間なしのころ、最初の死傷者が出たことを受け､電信局での報道の検閲が初めて実施された。第６マサチューセッツ連隊の死傷者名簿を打電しようと電信局に向かった報道記者は、電信局が合衆国ライフル分隊によって占拠されており、電信を禁じる命令が発せられているのを知った。憤慨した記者たちがシワード国務長官の自邸に押しかけると、同長官は「戦死した、または負傷した者たちに関する記述を送付すると、国民感情に影響を及ぼし、和解の障害になる」と述べた。

電信が脆弱な部分を抱えていることも浮き彫りになった。連邦離脱主義者たちがボルティモアに通じる全電信線を切断、ワシントンを囲む全鉄道も破壊され、ワシントンは一時北部との交信の道を断たれて孤立した。電信は小刀一本で容易に切断されるだけでなく、情報が敵に漏れる危険性も内蔵していたのだ。実際、敵に漏れるという理由で記者の電信使用が妨げられたケースもあった。

このように見ると、南北戦争は奴隷解放の戦いという表の顔と、電信駆使ハイテク戦争という裏の顔があったことがわかる。電信室から日常的に前線の司令と交信していたリンカーン大統領。『戦争司令官リンカーン』は「電信の裏に大統領あり」と書いている。良くも悪くもリンカーンは大統領としてただ者でなかった。

戦争に巻き込まれる

ジョセフ・ヒコに話を戻そう。１８６０年１１月、帰国した新見豊前守を正使とする遣米使節団と会ったことは前回ふれた。このとき、一行を出迎えた神奈川領事代理のヴァン・リードの通訳を引き受けたヒコだが、実はこの年の２月に、神奈川領事館付き通訳の職を辞していた。アメリカ政府の通訳でないことに不満を持っていたためで、ヒコはサンフランシスコからやってきた友人と横浜で貿易商社を興した。このころ横浜の外国人居留地には清国からの商品が入って来て、貿易港らしくなりつつあった。だが、船荷を集める程度にしかならず友人との共同を解消、ヒコが独力で事業を継続した。そんな折りに桜田門外の変が起き、攘夷の暴風が吹き荒れ始めたことも前号で触れた。

６１年になると、神奈川や横浜の役人から「身辺に注意を」との警告を受け、「東海道に馬で乗り出すことがないように」とか「居留地から絶対に遠くにいかないように」などと、こまごまと指示されるようになった。一

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

ヴァン・リードとヒコ（右）（『ヒコの生涯と新聞史』より）

方、ヒコ自身、神奈川の合衆国海軍倉庫管理官の地位を得たいとの希望をもっていた。こうした事情からヒコはまたもアメリカに渡ることを決意。９月１７日、横浜を出港、１０月１６日にサンフランシスコに着いた。

サンフランシスコで以前の雇い主のＴ・Ｇケアリーにアメリカに来た目的を話すと、ケアリーが「それならワシントンに行った方がよい」と、サンフランシスコの銀行家らの署名をつけて、海軍長官あての「アメリカ政府に奉公するうえで、日本の役人と同列に立てる職を得させてほしい」との請願書を書いてくれた。

こうしたなか、ヒコはアメリカの南部諸州が連合国を結成し、合衆国側の北軍と戦争状態になっていることを知った。友人から経済力は北部が勝っているが、将校は南軍の方が優秀と聞いており、どちらが勝つか即断できない状況だ。戦争は長期化の様相を呈していることから、ヒコは急ぎワシントンに行くことにした。

ヒコはパナマまでの船便をつかまえ、地峡部を汽車で横断、ニューヨーク行きの汽船、チュンピオン号に乗った。南北戦争は激しさを増していた。カリブ海に浮かぶセント・ドミンゴ島にさしかかったとき、右舷方向に１隻の気船が進んでいた。この海域は南部軍の武装商船が出没しており、船長は危険を察知、全速力で北進した。気船は船長が直感した通り、南軍の武装商船だった。追跡してきたが、スピードに勝るチャンピオン号は逃げきった。

１２月１６日、ニューヨーク港に到着。水先案内人が新聞の束を抱えて甲板にあがってきた。カリブ海での出来事があっただけに、戦争を肌で感じていた乗客たちはむさぶるように新聞を読んだ。「ポトマック河畔のわが部隊、近く行動開始か」「大会戦迫る」「南部軍兵力十万、ワシントンに進軍中」などの見出しが躍っている。なかでも「イギリス政府は北部軍にメーソン、スライデルの引き渡しを正式要求」という記事が注目された。

「メーソン、スライデル問題」というのは、南部連合の外交使節メーソンとスライデルの両上院議員が乗ったイギリスの郵便船に合衆国軍艦サン・ジャシントン号が乗り付け、二人とそれぞれの秘書を連れ去った事件。彼らは連邦の要塞に監禁された。イギリスは英国国旗への侮辱と受け取り、ロンドンの新聞は「合衆国が謝罪しないなら開戦すべきだ」と大きく報道。北部の人たちはイギリスを敵に回すことを恐れた。リンカーン大統領がイギリスに屈することの影響を心配していたところ、シアード国務長官が「（秘書を含む）４人を釈放する」と発表、ただちに実行され、事件は落着した（『アメリカの歴史』）。

ヒコらがニューヨークに着いたとき、事件はまだ決着

していなかった。イギリスが南軍に加担すると合衆国軍はイギリス軍と南軍との挟み撃ちにあい､敗北は必至だ。その報道に乗客たちはおびえた。ヒコも前途に不安を覚えたにちがいない。

翌々日、ヒコはケアリーの母がいるボストンに向かった。彼女はケアリーの義兄であるアガシス教授を紹介しくれた。１２月３１日に同教授に会うと、シワード国務長官や有力な上院議員への手紙を書いてくれた。くだけた文面から教授は国務長官と親しい間柄であるとヒコは感じた。

６２年１月初旬、ヒコはボルティモアのサンダースを訪ねた。サンダースは自分の息子がきたかのように喜んで迎えてくれた。アメリカに来た目的を話すと、一緒にワシントンに出かけて、上院議員のレイサムに会い、彼にひと肌脱いでもらおうといってくれた。

翌日、ボルティモアからワシントンに向かった。車窓から見ると、切れ目なくテントが並んでいた。テントの周りにいるのは新兵ばかり、とヒコには見えた。滝のような雨が降り続いたかと思うと、氷雨になったりと陰々とした空の下、秋の豪雨にさらされたひな鳥のようだ、とヒコは思った。ワシントンに着くと、地方から大勢の人々がやってきていた｡南北両軍の衝突を見にきたのだ。町は戒厳令が敷かれていた。

ホテルは制服の将校で満員。食堂は金筋入りの軍帽、肩章、金ボタンがうごめいていた。人々が口にする言葉といえば､「大勢が殺された」とか「南軍がどこそこを占領している」といった殺伐とした話ばかりだった。

レイサム議員に会うと、一緒に海軍長官に会ってくれることになった。海軍長官は「戦争中なので東洋の兵站部は一人も増員できない」とつれない返事をしたあと「シワード長官に会ってはどうか」と言ってくれた。レイサムに促されて国務省にシワード長官を訪ねた。倉庫管理官への紹介状を読んだシワードは、「神奈川領事館に正式の通訳官を置くことになった。通訳官になってはどうか」と勧めてくれた。通訳官は国務省管轄下の官職。ヒコは長官に感謝の言葉を述べた。

ボルティモアに戻って知人宅にいたとき、一人の憲兵中尉が家に入って来て、「憲兵隊まで同道ねがう」とヒコを連行した。憲兵隊に着くと、暖炉のそばにいた大尉が「捜していた男だ。２階に連れていけ」と命じた。大尉に旅券を見せて「誰か他人との間違いだ」と言ったが、大尉は「ワシントンから逮捕を命じる電報がきている」と容赦なかった。

連れて行かれたのは片隅にベンチが数脚あるだけの汚い部屋だった。やがて中尉がやってきて「下におりろ」という。ヒコの友人が大尉や憲兵司令と話をつけてくれたというのだ。１階におりると友人がいた。２万５０００ドルの保証金を出してくれたので解放されたとヒコは知った。

ことの次第はこうだ。南軍の将校が北部の首都に攻撃を仕掛けるために偵察をしている、との情報が流れていた。この将校の古い写真を手に尾行していた探偵がヒコを「こいつだ」と思い込んだことから逮捕されたのだった。大尉は「逮捕したのは間違いとわかった」といい、保証金を返却したうえ、使者をヒコの元にやって陳謝した。

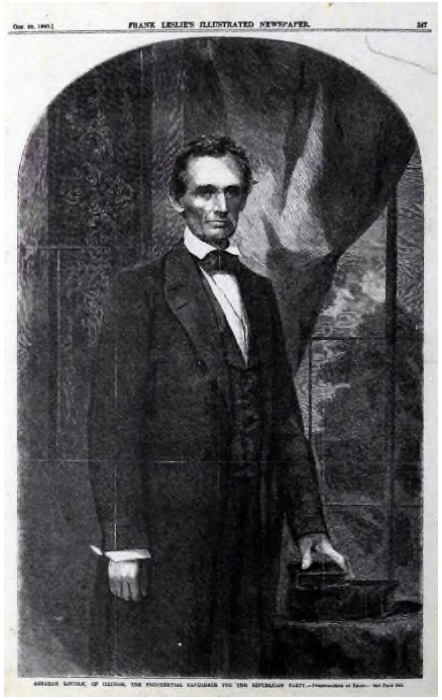
サンダースの家に「神奈川領事館通訳官」という正式辞令が届いていた。３月１２日、帰国のあいさつのためシワード長官を訪ねると、長官は「我が合衆国のタイクンに会わないで帰国する手はない」といった。このひと

言で、日本人が初めてリンカーン大統領に会うという歴史的瞬間を迎えることとなった。
　この模様をヒコは『アメリカ彦蔵自伝』のなかで、次のように書いている。
「さあ。ヒコさん、行こう」。シワードはそう言って部屋を出た。裏庭に入るとシワード氏は私の腕をとり、そこを横切って大統領官邸に引っぱって行った。歩きながらシワードは言った。
「今日は閣議のある日だが、君を、われらの偉大にして善良なる人物に会わずに出発させるわけにはいかん」
　こうしてヒコはリンカーン大統領に会うことになった。
『リンカーン』に掲載されている南北戦争当時のワシントン中心街の地図によると、ホワイトハウスのすぐ西に陸軍省、東に財務省と国務省が並んでいる。国務省のすぐ北にシワード長官の家がある。ヒコがシワードに会ったのが自邸なのか国務省なのかは伝記からはわからない。以前、シワードに国務省で会っていることから、このときも国務省の長官室に訪ねたと考えるべきだろう。国務省の裏庭がどのスペースを指しているのかわからない。国務省の裏はホワイトハウスとは反対方向だ。そこを横切るって大統領官邸に引っぱって行かれた、というのだから、むしろ国務省の前の庭を通ってホワイトハウス正面玄関に向かったのではないだろうか。
　ヒコはすでに２回、ホワイトハウスに入っている。正面か裏かくらいはわかっているはずだが、緊張していたせいで記憶があやしげになっていたのかもしれない。

リンカーン大統領に面会

『アメリカ彦蔵自伝』によるリンカーン面会幕をつづける。
　シワード国務長官とヒコが大統領室に入ると、大統領は肘掛け椅子に腰を掛けていた。そっくりかえり、両足首を組み重ねて前の机の上に投げ出し、眼鏡を額までずりあげていた。彼はすぐ近くにすわっている一人の陸軍将校の話をじっくり聞いていた。その将校は、たくさんの書類を手に持ち、自分の机の隅には、もっとたくさんの書類を置いていた。部屋に入るときに大統領は私たちに目をやった。シーワド氏は私に椅子を示し、それに腰をおろせと言った。彼自身は、テーブルのところに行って、新聞をとりあげて読みだした。
　私（ヒコ）は部屋を見わたし、将校が大統領にしゃべっているのをきいていた。将校の立て板に水の弁舌の大体から察すると、この男は騎兵大佐で、突然上司からクビにされたらしい。彼はこれを不当と考え、大統領の口ききで復職させていただきたいと言うのであった。
（略）
　この男がいなくなった後、大統領は腰をあげてこちらへやって来たので、私たちも席を立ち上がった。
「シーワド君、こんにちは」と言って、相手と握手した。そこでシーワドは言った。
「私の友人で、日本人のヒコ氏を紹介したいと思いますが」
　大統領は大きな手をさしのべて、日本のような遠いところからよく来てくれましたね、と言った。彼は私と、まごころのこもった握手をかわし、それからアメリカの

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新



境遇について、数多くのことを尋ねた。

私たちがしゃべっているうちに、財務長官が入って来た。それから海軍長官もやって来た。そこで私は、大統領にどうも任官ありがとうございましたとお礼を述べ、急いでいとまごいをした。ほかの人びとにも別れを告げ、どうぞ無事でというあいさつを受けて退出した。

大統領は長身痩躯、手は大きく、黒みがかった髪には銀髪がまじり、わずかばかりの頬ひげをたくわえていたが、口まわりはきれいに剃っていた。彼は黒いフロック・コートを着ていた。きわめてまじめで親切な人間で、接する人びとの誰にも愛され、とくに自分の一統や友人からひどく愛されていたとのことである。

写真：ヒコが持ち帰った新聞に掲載された大統領候補時代のリンカーン（『ヒコの生涯と新聞史』より）

以上の記述によると、リンカーンは「日本のような遠いところからよく来てくれましたね」と言った後、アメリカでの境遇について数多くの質問をしたに過ぎない、ということになる。歴史的瞬間というには、これではいかにもさびしい。

『開国逸史――アメリカ彦蔵自序伝』には「大統領は遠来の紳士に面接するを喜ぶ旨を告げ、大なる手を広げて親しく握手の礼を賜ひ、日本の状態を問われたり」とある。ヒコが日本の状態をどう答えたかは何ら記されてない。もう少し色はつかないものか。手元のヒコをテーマにした小説のページを開いた。

中川努『日系米人第一号――アメリカ彦蔵と呼ばれた男』（現代教養文庫）

大統領は大きい手をさしのべて、日本のような遠い国からよく来ましたねと言った。そして、アメリカではどうしているのかなど、いろいろのことを質問した。

吉村昭『アメリカ彦蔵』（新潮文庫）

大統領は、大きい掌を出し、

「日本ノヨウナ遠イ地カラ良ク来マシタネ」

と言って、彦蔵の手を握った。優しい眼であった。

（略）

「君ノヨウナ人ガ領事館ニ勤務シテクレルトハ、頼モシイ。アメリカノミナラズ、日本ノタメニモ尽力シテ下サイ」

リンカーンは、大統領というより優しい農夫のような感じであった。

山下昌也『ヒコの幕末――漂流民ジョセフ・ヒコの生涯』（水曜社）

ヒコはリンカーンに問われるまま、漂流からの話をした。リンカーンは、いちいち頷いて聞いていた。ヒコは任官のお礼を述べた後、さっきシーワド長官から聞いた大統領の政治理念について質問した。

「人は全て平等とはどういうことでしょうか」

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

聖書にそう書いているのは知っている。しかし、ヒコが経験したアメリカ社会でも平等とは言い難かった。リンカーンはニコリともせずに答えた。
「それは基本的な権利です。分かりやすく言うと、どんな人間でも、自分で働いて得たパンは誰にも邪魔されずに自由に食べることができるということです。その権利を護るために国家があり、それを実現させるのが政治の役割なのです。ところが、そのパンを奪われたり、食べることに干渉されたりする人々が現実にいるんだ。今の戦いもそれを無くすためのものですよ。その責任者として私はいるんだ」
（略）
国民や国家の責任と義務について話は続いていたが、ほどなく財務長官、海軍長官が打ち合わせのために入ってきたのを期に、ヒコはお暇の挨拶をした。
山下氏は想像をたくましくして書いている。確かにこれくらいの話をヒコにしてくれていたら、文句なく歴史的な出来事といえただろう。
『彦蔵漂流記』には漂流から最初の帰国までの記述を中心とした「漂流記」と、アメリカなどで見た文物を紹介する「漂流記餘話」からなる。その「漂流記餘話」にアメリカの大統領制や政治の仕組みに関する記述がある。アメリカでだれかから聞いたことは間違いない。この内容についていずれ詳述するつもりだが、リンカーンに会ったとき、アメリカの政治制度の基本は知っていたと思われる。おそらくサンダースに教えてもらったのだろう。サンダースは税務官というれっきとした合衆国の役人なのだ。
すでに述べたように、ヒコがリンカーンに面会したのは１８６２年３月１２日だ。この前日、大統領は戦争令を発令してマクレランの総司令官としての任務を解いたばかりだ。これはどのような意味をもつのだろうか。
『リンカーン』によるとこの年の１月２７日に「一般戦争命令第一号」を発布し、２月２２日（初代ワシントン大統領の誕生日）を「合衆国の陸海軍が反乱軍に対して総攻撃する日」と定めた。これを受けて軍司令官のマクレランは軍隊をポトマック川の船で輸送し、上陸後リッチモンドを目指す作戦を立てた。これに対し、リンカーンは陸路を進軍し、南軍をリッチモンドに向けて後退させるという接近戦をとれば首都ワシントンを守ることができると考えた。マクレランの迂回作戦ならば南軍はリッチモンドを犠牲にしてワシントンを攻略するかもしれないと懸念したのだ。彼はワシントンが攻略されて、諸外国が南部連合を承認することを恐れていたのだ。
３月８日、南軍の砲兵中隊が後退し始めたのをみて、マクレランは絶好機とばかりに敵陣への急襲を命じた。ところが南軍は全軍挙げてテント、兵糧、武器もろとも退却。そこには大砲にみせかけて黒色に塗った丸太棒が残されていただけだった。難攻不落を偽装した要塞を前に、マクレランは足止めをしていたのだ。「クエーカー教徒の大砲」と呼ばれたこのトリックにまんまとひっかかったマクレランは「世界中の笑いもの」と嘲笑された。
こうした次第でリンカーンはマクレランの総司令官の任務を解いたのだ。大統領は総司令官ポストを空席のままにし、大統領と陸軍長官が総合的な戦略を打ち出すこととした。マクレランを最高幹部から外したことで保守派が反発することが予想され、リンカーンの判断が正しいかどうかの瀬戸際だ。リンカーンがことのほか神経を遣っているときにヒコが面会に訪れたのだ。ヒコの自伝からは、そうした緊張感がうかがえず、いつものように

嫌々ながら猟官陳情を受けているようである。
　すでに述べたようにリンカーンは午前中、職を求める市民と会い、午後、電信室で気晴らしをしている。シワード国務長官は当然そのことを知っていたので、ヒコを連れていったのは午前中だろう。すでに領事館通訳という職を得ていたので、シワードはヒコがリンカーンに嫌がられることはない、と踏んでいたはずだ。リンカーンがヒコと会話をしているとき、チェース財務長官らが入室した。第一次ブルランの戦いの際、リンカーン、シワード､チェースが電信室に集まったことはすでにふれた。同じメンバーが大統領室に居合わせたことは注目すべきだろう。彼らはその日の午後、電信室で顔を合わせたのかもしれない。この３人は共和党のなかで大統領候補を争った仲だが、大統領に選ばれたリンカーンは彼らを重要閣僚に指名した。３人はリンカーン体制の３本柱なのだ。奇しくもヒコはこの３人に出会ったのだ。
　さて､リンカーンはヒコに政治姿勢を語ったかどうか。これまで述べた経緯をみれば、リンカーンにそのような時間も精神的余裕もなかったと考えるべきだろう。戦場はワシントンのすぐそばだ。神奈川領事館通訳になる男にこの緊急時のなか、そのような話を直接しなければならない理由がない。
　むしろ戦争が緊迫するなか、国務長官がヒコを連れて大統領に面会させ、それをリンカーンが受けたことが驚きというべきだろう。この戦争は決して悠長な戦いではない。第一次世界大戦の先駆的戦争との分析があることはすでに述べた。合衆国軍の総司令官である大統領に会ったことは、ヒコがその認識があったかどうかにかかわらず極めて歴史的なできごとだった。やがて世界中に波及するであろう近代戦争の目撃者となったのだ。

　南北戦争が終結し、奴隷解放に向けてさあこれからというとき、リンカーン大統領は暗殺された。このことはすでにふれた。ヒコはリンカーンに会った翌月の４月１日、ニューヨークをたち、カリフォルニア、上海を経て６２年１０月１３日、横浜に着いた。領事館通訳の業務についたが翌年９月３０日辞任。６４年６月、「海外新聞」を発行した。日本語で書かれた我が国初の新聞というふれこみだ｡この新聞については次号で取り上げるが、海外新聞第６号は「北部大統領レンコロン、ワシントンの芝居を見物に行きしに１１時ともおぼしきころ、一人の狼藉者が袖銃で一発に（大統領を）打倒」という記事を載せることとなった。
『アメリカの歴史』によると、リンカーン暗殺事件の概要は次の通りである。
　１８６５年４月１３日夜、リー将軍の降服を祝ってワシントンの町はイルミネーションが施された｡１４日夜、リンカーンは妻と共にフォード劇場のボックス席で『アメリカのいとこ』という芝居を見物した。警護すべき護衛は芝居をよく見たいと２階席にいった｡午後１０時半、一発のピストルの音が響いたかと思うと、大統領は席にすわったままがっくりと体を伏せた。犯人のブースはボックスから舞台に飛び降り、バージニア州の標準語であるラテン語で「暴君の運命はかくのごとし」と叫び、裏口から逃走した。
　大統領は劇場の向かいの下宿屋に移され、小さなベッドに寝かされた。リンカーン夫人は１時間に１度、夫の枕もとに近寄っては涙を流した。４月１５日午前７時２２分、大統領の心臓は止まった。
　リンカーンが撃たれたころ、シワード国務長官も自宅で襲われた。シワードの下あごは死人のようにがっくり

明治150年　ジョセフ・ヒコの幕末維新

上野彦馬が撮影した「西南戦争　田原坂」(『写真発祥地の原風景／長崎』より

垂れていたが、一命はとりとめた。

ヒコはシワード国務長官に見舞いの手紙を出した。１８６５年９月２５日付けの返事がシワードから届いた。「万里をへだてた貴国の心地よき風光のさなかにあって、小生をお忘れなきご厚情まことにありがたい」としたうえで「われらの祖国は今回はからずも苦難に見舞われましたが､それにもかかわらず国民一同災厄を脱しました」としたためられていた。

西南戦争での電信

ペリーが持ち込んだ電信機に話を戻したい。幕府役人が強い好奇心をもってデモンストレーションに接したことはすでにふれた。反射炉を築いたことで歴史に名を残した伊豆韮山代官、江川英龍は電信機の貸し出しを願い出て許され、調査研究にのりだした。成果がでないまま英龍は急死したが、そのころオランダ政府から幕府に最新式モールス電信機が贈られた。この利用方法の習得を命じられたのが勝麟太郎だ。『サムライ、ＩＴに遭う』によると、１８５５年８月、浜御殿（現浜離宮）で「天地和合」「鶴亀」など７語について実演を行った。通信は成功、電信機は単なる見世物から利用する物へと進化した。

勝は１８６０年、咸臨丸で太平洋を横断しサンフランシスコに滞在中、近くの島にいた中浜万次郎に電報を打って呼び寄せた。これが日本人の電報利用の第一号といわれている。電信線を見た最初の日本人と思われる万次郎。この電報を受けてさぞ感慨無量であっただろう。ヒコがニューヨークのホテルで電信による通信にふれて７年後のことだ。

そのヒコがリンカーン大統領に会ったとき、電信を最大限に活用して戦争を進めていることはもちろん知るはずがなかった。だが、戦争に勝利することだけを考える権力者がその有効性に飛び付かないはずはなく、開国して日が浅い日本もその例外ではなかった。

明治に入って鉄道と電信は富国政策の一環として導入されるが、なかでも電信は一歩先んじ、西南戦争で戦況報告として政府軍に使われた。このため「政府軍の勝利は電信の勝利」と分析する研究者もいる。

まず鉄道についてみておこう。我が国の最初の鉄道実験はペリーのデモンストレーションから１１年後の１８６５年、長崎で行われた。貿易商トーマス・グラバーが６００メートルの線路を敷設、蒸気機関車に客車２両を

つなぎ、長崎市民を乗せたと記録されている。
　明治維新後の１８６９年１１月、新政府は新橋―横浜間の鉄道事業を決定、翌年から工事が始まり、１８７２（明治５）年１０月１４日に正式に開業。７３年の乗客の１日平均は４３４７人。年間収入は旅客４２万円、貨物２万円。直接経費を差し引いた利益は２１万円で、上々の滑り出しだった。
　鉄道事業に並行して１８６９年１０月、東京―横浜間３２キロに電信線が引かれ、フランス製の電信機を使って日本初の電信サービスが始まった。
　１９７７年、西南戦争が勃発、鉄道事業の展開が困難になり停滞したが、電信線の方は全国に張り巡らされるようになり、西南戦争のとき、東京から長崎、植木（熊本城の北)、熊本まで電信線が延びていた。
　西南戦争は征韓論に敗れた西郷隆盛が首領となって政府に反旗を翻した戦争だ。なかでも激戦となったのが政府の熊本鎮台が置かれた熊本城の攻防戦。田原坂の戦闘で政府軍が不利に展開、その戦況がただちに電報で東京に伝えられた。
　３月７日付の東京日日新聞に「電報ハ吾人ヲシテ戦地ノ実形ヲ数百里外ニ坐観セシムルの快器ナリ」と伝えており、司馬遼太郎は『翔ぶが如く』のなかで「電報の威力が認識されたのは、この西南戦争からであるといっていい」と書いている。
　熊本城の炎上も政府に報告された。すでに１８７３年に徴兵制がしかれており、東京にいながら、最前線の状況を把握していた政府軍は形勢不利との情報が入ると北海道や東北など各地から援軍を送りこむことができた。
　電信線は鹿児島までは延びていなかった。開明派の薩摩藩主、島津斉彬は電信機の製作実験をさせている。斉彬を尊敬していた西郷が電信に着目しなかったのはどういうことだろう。新政府では西郷は参事という重職にあった。鹿児島まで電信線の延伸を急がせることはできたのではないか。この一点だけでも西郷はこの戦争で勝とうとは考えていなかった証左といえるかもしれない。
　ちなみに政府軍は軍艦１２隻をもち、通信用の銅線１・６トンと鉄線３・３トンを用意したのに対し、西郷軍には軍艦がなく電信資材については記録がない。政府がアメリカの南北戦争をどこまで研究したかは明らかでないが、政府軍だけが近代戦争的な構えで臨んだのだ。
　私が本稿をここまで書き進めたとき、東京都写真美術館で開催された「写真発祥地の原風景　長崎」展（３月６日～５月６日）を見た。長崎を中心に幕末から明治初年に撮影された約２００点の写真が展示されていて、居留地など開国された長崎の実景を知ることができた。そうしたなか、会場の出口近くに展示された１点に釘づけになった。上野彦馬（１８３８～１９０４年）が撮影した「西南戦争　田原坂」の題がつけられた写真だ。
　上野は我が国最初期の職業写真師。彼が長崎で開業した日本初の写真館「上野撮影局」で坂本龍馬、高杉晋作らを撮影。また、西南戦争の戦跡を撮影したことから我が国初の戦場カメラマンとして知られる。
　展示された写真には、荒れ果てた林の間にゆっくりとＳ字にカーブする道があり、その道端、写真ではほぼ中央に立つ一本の電信柱が写っている。電信柱には左右に二つの碍子があり、２本の電線が張られている。撮影は１８８７年。西南戦争の年だ。西南戦争戦跡の一環として撮られた一枚であることはまぎれもない。
　問題はこの電線だ。１８８３年、我が国で初めての電灯会社として東京電灯会社が設立され、８６年１１月に

送電された。熊本電灯会社が設立されたのは８９年だ。西南戦争のとき、まだ熊本には電灯会社はなかった。上野の写真に写る電線は電灯用ではない。となれば電信線であることは明白であろう。上野が電信柱を写真中央に配したのは、この意味を十分認識していたからにほかならない。

上野撮影の「西南戦争　田原坂」はこの戦争が電信活用の近代戦争であることを示す貴重な証拠写真なのだ。

ヒコと西南戦争は何の関係もない。ただアメリカで起きた近代戦争の現場にいたことは無視できない。「富国強兵」を旗印にした明治維新。欧米のものを何もかも取り込もうとした結果、戦争の近代化も導入された、といえるだろう。言い換えるなら、ヒコは近代戦争の原点の場に迷い込んだのだった。

ヒコがリンカーンに会ったとき、奴隷解放というきらびやかな政治家というよりは、ハイテク駆使の軍事大統領だった。明治政府が学んだのは奴隷解放という人権重視ではなく、戦争の近代化ではなかったか。ヒコのせいでないことはいうまでもない。

明治150年企画

ジョセフ・ヒコの幕末維新③

井上脩身

岸田吟香編

わが国初の邦文紙「海外新聞」

写真は特に記載なき場合はウイキペディアより

余にして若し文章あらば、時機を得て新聞記者と成り、時事を痛快に論ぜんものをと思い初め…る。彼の記者志望は次第に動かしがたいものになっていった。

（注・当時の慣習に従って1872年までは旧暦で記述する）

ジョセフ・ヒコの海外新聞

1862年（文久2）年には坂下門外の変、生麦事件が起こるなど尊皇攘夷の嵐が吹きまくっていた時代である。外国の使節や商人、外国奉行などは攘夷派に狙われ、海外情報にかかわる洋学者なども、ある意味では命がけで仕事をしていた。一方で海外に関する知識への欲求は盛んになるばかりだった。

わが国最初の邦文紙、海外新聞は、そんな時代に、横浜在留の米国領事館附通訳・ジョセフ・ヒコによって発刊された。64（元治元）年6月のことである。この事実は元帝塚山学院短大教授・近盛晴嘉氏の長年にわたるジョセフ・ヒコ研究によって明確になった。

ジョセフ彦（浜田彦蔵）は1837（天保8）年、播州播磨町吉宮（現在の兵庫県加古郡播磨町）に生まれた。幼名を彦太郎といった。幼いときに父親をなくし、母は隣村の船頭と再婚、「浜田」はその嫁ぎ先の姓である。

50年、13歳のとき、継父に連れられ、「住吉丸」という船で初めて江戸に向かった。途中で同郷の船頭が乗った新造船「栄力丸」に出合い、誘われて乗り換えたのが運命を変えた。江戸見物は無事に終えたが、帰る途中、遠州灘で激しいあらしにぶつかり遭難したのである。

50日余りの漂流ののち、米国の商船に救助され、翌51年、サンフランシスコに上陸する。そこで彼は、税関長のビーバリー・C・サンダース氏夫妻に出会い、実の息子のように可愛が

浜田彦蔵と海外新聞22号の表紙（右上）右下はヒコのサイン（『サー大先覚記者伝』より）

8

『「毎日」の３世紀』の海外新聞に関する記事

私（筆者）が勤めていた毎日新聞社の社史『「毎日」の３世紀――新聞が見つめた激流１３０年』（毎日新聞社１３０年史刊行委員会、２００２年２月２１日刊）は冒頭の「夜明け前――幕末の新聞興亡」の項で、「１８６２（文久２）年、生麦事件など尊王攘夷の嵐が吹きまくっていた時代にわが国最初の邦文紙、海外新聞は横浜在留の米国領事館附通訳・ジョセフ・ヒコによって刊行された」と記述、ヒコが日本の新聞史上、草分け的な存在であることを明らかにした。毎日新聞の前身である東京日日新聞誕生までの年表のなかにもこの海外新聞創刊が書きいれた。海外新聞の発行に深くかかわったのは岸田吟香である。彼は東京日日新聞の初代主筆になっており、社史は「分かりやすい文章で書かれた一般民衆のための新聞というヒコの理想は、生来の自由人、岸田吟香にひきつがれ、のちに大きな実りとなる」と分析している。近代新聞への道を切り開いたのはヒコと吟香の二人三脚だった。

新聞から得る綿花情報

アメリカ領事館が置かれた本覚寺の入口

前号でジョセフ・ヒコがリンカーン大統領に会ったことを紹介した。大統領と別れ、神奈川に着いた１８６２年１０月１３日から今号を始める。

上陸して横浜村に入ると不穏な空気に包まれていた。２カ月前、薩摩藩主の父、島津久光の行列が生麦村に差し掛かった際、騎乗のイギリス人商人３人と婦人１人に藩の兵士が切りつけ、商人の１人が死亡、2 人が負傷する生麦事件が発生、血なまぐさい攘夷の嵐はやむ気配がなかった。

こうしたなか、ヒコは通訳官任命書を携え、神奈川・本覚寺におかれたアメリカ領事館におもむいた。公使はハリスからプリュインにかわり、領事にはフィッシャーが就任していた。ヒコは本覚寺に一室が与えられた。品川・御殿山に建設中のイギリス公使館が焼き打ちされるなど、攘夷派による事件が相次ぎ、翌年５月、アメリカの蒸気船が関門海峡の入り口で、長州藩の軍艦に砲撃される事件が起きた。激怒したプリュイン公使は軍艦「ワイオミング」を現地に差し向けて長州の軍艦を拿捕するという。ヒコはワイオミングに乗艦して赤間関に向かった。

このことついては次号で扱うが、ヒコが赤間関から横浜に戻ってしばらく後、東海道の茶店の厠にワイオミングの水先案内として雇われた男の首が投げ込まれているのが見つかった。壁の張り紙には「ほかに二人の不埒な者が乗艦しており、追って同様の仕置きを受ける」と書かれていた。二人のうちの一人がヒコであることは明らかだった。ヒコは弾を装填した拳銃を身につけ、領事館から一歩も外に出なくなった。

数日後、領事館に京都の豪商が何者かに襲われ、その首が橋のたもとにさらされた、との情報が寄せられた。首のかたわらには「この不逞なやからは私利を得ようとして夷荻と商いしたので、天誅を加えるもの」と書かれた紙が張られていたという。この情報に、横浜で外国人と商取引をする商人たちは動揺。攘夷派の天誅の対象になるのでは､と恐れおののき店を閉める者まで出てきた。

ヒコは、このまま領事館にとどまっているといつかは殺され、首をさらされると恐怖をいだいた。辞表をフィッシャー領事に渡すと､「本国に送る」といっただけで、遺留の言葉はなかった。

攘夷劇の主舞台となった京都では残忍な事件が次々に起きた。豪商、八幡屋卯兵衛が暗殺され、その首が三条大橋のたもとの棒杭に突き刺された。「外国人と商取引をして巨利を得ているのは断じて許し難い」との書きつけがあったことが横浜の商人に一層の恐怖心を与えた。ヒコのところに奉行所の役人がやってきて「長州藩士ら

生麦事件の現場（横浜市鶴見区生麦）

しき者がうろついている。決して東海道筋にでないよう」と警告した。ヒコの命がねらわれている、というのだ。

１８６３年８月、アメリカ船から国務省の辞表受理の書類が届いた。その日のうちにヒコは領事館を離れ、横浜の日本人街の親しい商人の離室に住みついた。

１０月になると外国の新聞で、生麦事件の処理について薩摩藩とイギリスの代理公使ニールとの間で講和条約が進められていることをヒコは新聞で知った。

ここで生麦事件について概要を記しておこう。

１８６２（文久２）年、島津久光は家臣４００人をしたがえ江戸から帰京の旅路についた。生麦村にさしかかったところ、上海から横浜に来ていたイギリス人商人リチャードソン、香港から来ていたボロデール夫人、横浜在住のクラークとマーシャルの４人が乗馬でやってきた。薩摩藩士に脇に寄るよう注意され、道路わきを進んだところ久光の駕籠が見えた。今度は引き返すよう命じられ、馬の首をめぐらそうとしたとき、数人の者が太刀をふるって斬りつけた。リチャードソンは瀕死の重傷を負って落馬、藩士にとどめを刺された。他の二人も重傷を負い、ボロデール夫人だけが無事横浜に戻り、居留地の人々に事件を知らせた。

事件についての外交交渉がニールと幕府首脳の間で行われ、ニールは賠償額１０万ポンドを要求。薩摩藩には犯人の逮捕・処刑と２万５０００ポンドの償金を求めた。イギリス艦隊７隻が鹿児島湾に進入したが、薩摩藩との談判はととのわず、外交交渉は決裂、英艦隊は薩摩藩の汽船３隻を捕獲したのを機に戦闘が始まった。交戦開始４５分後､旗艦ユーリアス号のジョスリング艦長(大佐）とウィルモット中佐が戦死するなど、イギリス艦隊のほとんどの艦が被弾し､死傷者は６０人余りに及んだ。薩摩側では鹿児島城下の１割が焼けた。イギリス艦隊は翌日桜島砲台を攻撃したあと、湾口に退却、応急修理を施し、横浜に帰った（小西四郎『開国と攘夷』日本の歴史１９、中央公論)。

『アメリカ彦蔵自伝』（中川努、山口修訳、東洋文庫）には「土地の新聞は次の記事をのせている」として、以下のニュースを掲載している。

薩摩の役人が多数、イギリス公使のもとに伺候して、藩公の代理として会見を願い出た。神奈川県庁付きの大君（タイクン）の役人が公使館に案内した。ニール大佐は「イギリスの要求事項はすでに薩摩公に伝えてあり、要求は修正できない」としたうえで、言いたいことがあれば何でも承ると表明。そこで（薩摩藩の）一同は「薩摩公は戦争を望んでいないし、初めから反対だった。主君は何ら非難されるべきことはない」と述べた。

これに対しニール大佐は「イギリス艦隊が薩摩と一戦を交えようと鹿児島まで出かけたのではない」と述べ、①艦船は三日間鹿児島の砲台の真下に停泊したが、その

スタンホープ式手動印刷機

間、どの船も大砲一発も撃たなかった②薩摩公に宛てた通牒への回答は非常に不満足なもので、こちらの要求は拒絶されたものと解釈せざるを得なかった③この不満足な回答のため艦隊は薩摩の船舶を拿捕したが、これも要求した罰金の支払いの保証としておさえた④これはどこでも普通に行われる予防措置――を挙げ「薩摩が責めを負わなければならないのは（生麦で被害に遭った）リチャードソン氏殺害の件だけではなく、一片の警告もなしに艦隊を砲撃することによって戦闘行為を開始したこと」と指摘した。

薩摩の使節団は「イギリス艦隊が船舶の拿捕によって戦闘行為が開始されたと信じている」と述べたが、ニール大佐は薩摩側の手前かってな考え方だと論破した。

使節団は公道における交通妨害の件にほこさきを変えた。「藩公の行列の通行を妨害する権利は認めがたい」としたうえで「イギリスの法律は、行列の通行を邪魔した一行があっても処罰しないのか」と尋ねた。ニール大佐は「イギリスでは乞食でさえ国王と同じく公道を通行する権利を持っており、諸般の状況により右側通行、左側通行という規則さえ守っていればよい」と返答。薩摩側も「行列の途をあけようとしない人物には、せいぜいむちで軽くたたいて道から引きずりだすくらいのことで、殺したりひどい傷を負わせるものではない」と述べ、故意の殺人は日本でも死罪に処せられることを認めた。

こうした交渉の結果、薩摩藩は２万５０００ポンドの賠償金を支払うことになったが、交渉の様子をヒコが新聞から手にとるように知ったことに注目したい。「土地の新聞」とあるが、イギリス側にたった記事であることからみて、横浜で発行された外国の新聞であろう。

山室清『横浜から新聞創った人びと』（神奈川新聞社）によると、１８６１年１１月２３日（文久元年１０月２０日）、イギリス人Ａ・Ｗハンサードによって横浜最初の欧字新聞『ジャパン・ヘラルド』（週刊）が発行された。

ハンサードはイギリスの植民地であるニュージーランドで新聞を発行した経験があった。スタンホープ式手動印刷機を携えて来日し、同年６月２２日、長崎で我が国初の欧字新聞『ナガサキ・シッピングリスト・アンド・アドバータイザー』を週２回発行。２８号まで出したところで横浜にやってきたのだ。

『ジャパン・ヘラルド』は４ページ新聞。イギリス人のブラックを主筆に迎え、海外、国内のニュースや在日公館、領事館の広報、為替相場、商業広告などを掲載した。生麦事件では危機感を募らす外国人には頼みになる情報源だったという。

１８６３年から週刊の本紙とは別に広告中心の『デーリー・ジャパン・ヘラルド』を出した。我が国最初の日刊新聞とされている。

ヒコが読んだ「土地の新聞」がヘラルド紙であることは間違いないだろう。４ページの週刊紙としては、交渉のやりとりが実に真に迫っていることに驚かされる。ヒ

ゲティスバーグの戦い

コがアメリカで新聞に目を通していたことは前号でふれたが、攘夷風が渦巻くなか、日本で目にした新聞に強烈な印象をもったに相違ない。後述するヒコ発行の新聞はヘラルド紙から強く影響を受けた結果であったといえるだろう。

ちなみにヘラルド紙は経営者が変わりながら１９１４（大正３）年までつづいた。

文久から元治に元号が改められた翌年４月、イギリスの軍艦「コンクェラー号」が横浜に入って来た。将校２２人と５３０人の海兵隊員が乗っていた。横浜、神奈川在住の外国人保護を目的としたもので、幕府も了解していた。海兵隊員は山手に天幕を張り、外国の居留民は駐留を喜んだ。ヒコは身の危険が薄らいだことを感じていた。

こうして横浜での商取引は少しずつ落ち着きを取り戻してきた。とはいえ取引のうえで言葉の問題が立ちはだかる。英語がわかるのは奉行所に配属されている通詞だけ。彼等は幕府と外国の外交官との交渉の通訳が本務。商人たちの通訳は禁じられていた。

領事館の通訳官を辞したヒコにその制約はすでにない。英語が堪能であるだけにとどまらず、サンフランシスコの商社に勤務した経験から､商行為にも通じており、ヒコほどうってつけの商業通訳はほかにいない。ヒコはしばしば商取引の場に立ちあわされ、その通訳だけでなく、契約書の翻訳や作成などを行った。

このころ、アメリカでは南北戦争がつづいていた。アメリカは綿花の主要生産国だったが、綿花畑が戦場になったことなどから生産高が激減、綿花が高騰していた。日本の商人たちは各地から綿花を買いつけて外国の貿易商に売りさばき、大きな利益を得ていた。ヒコ自身も綿花取引に手を出していた。

山本通氏『幕末と明治初期の外国商社と横浜商人――コーンズ商会研究のためのノート』によると、１８６３年と６４年、原綿は輸出全体の２０％を占めた。イギリスの商人が世界中から買いあさったためという。ところが６５年にはゼロだった。南北戦争に伴う一時現象だったのだ。

しかしわすかの期間とはいえ、綿花輸出の増加が横浜港を活況にし、寂しい漁村だったのがうそのように洋館が建ち並んだ。世界最大の経済大国、イギリスから定期船が入るようになり、新聞が届けられた。居留地の外国人は新聞からイギリスをはじめヨーロッパの情報を入手。ヒコももちろん新聞によって綿花の相場を知る。やがてヒコ自ら新聞をつくろうと思いたつのだった。

目の治療するヘボン医師

金婚式のヘボン夫婦

ヒコがつくった新聞の話の前に、アメリカでヒコが出合った新聞についてふれておきたい。

この調査をしたのはヒコ研究の第一人者で元読売新聞記者の近盛晴嘉氏である。近盛氏の『ジョセフ・ヒコ』（吉川弘文館）によると、近盛氏はヒコ在米時代のヒコを報道した新聞を探した結果、１９６２年、ワシントンで発行された１８５７年１１月３日付『イブニング＝スター』紙のコピーを入手。新聞には「ワシントン＝ニュース＝アンド＝ゴシップ」欄に「興味ある人物」としてヒコが登場する１８０行の記事が掲載されている。

この記事のなかでサンダースがグイン上院議員に宛てた、ヒコが日本人であり、漂流してアメリカの船に救われてアメリカに着き、ボルティモアで学校教育を受けたことやキリスト教を信奉していることなどをしたためた書簡を紹介。サンダース氏はヒコについて「彼は私が知る限りで、比類なく誠実で真心ある少年。非行というものは全くなく忠実、率直な気だて」と述べている。

この記事によって、当時２０歳だったヒコはワシントンの社交界の人気者になった、と近盛はいう。ヒコは新聞というものの威力を肌で感じとったにちがいない。

翌年、帰国の途についた際に立ち寄ったハワイでベイツ検事総長、地元新聞のデンマン編集長の訪問を受けたとヒコは『自伝』に記している。横浜で商取引にかかわったときには、ヒコは新聞というものがすでに身近なものになっていたことはまぎれもない。

すでに述べたように横浜では『ジャパン・ヘラルド』が発行されていた。１８６２年にはアメリカ人の利益を守る立場から『ジャパン・エキスプレス』がショイヤーによって創刊された。

横道にそれるが、ショイヤーの夫人は画家だ。我が国の草分け的写真家の一人、下岡連杖は油絵を夫人から、写真技術をショイヤーから学んだ。ついでながらショイヤーは横浜の写真を初めて撮ったことから、写真術の恩人ともいわれている。

本筋に戻る。翌６３年、マカオ生まれのポルトガル人、ローザが『ジャパン・コンマーシャル・ニュース』を発刊している。

一方、幕府は６２年、邦文の『官板バタヒヤ新聞』を発行。日本語で「新聞」と名がつけられた初めてのものだが、日本でつくった新聞とはいいがたい。バタビアで発行されたオランダ政庁の機関紙を日本語に抄訳して出

ヒコがいたころの横浜居留地風景

したにすぎないからだ。ほかに、英米の牧師が中国で布教のために発行した漢文の雑誌からキリスト教関係の記事を省いて洋書調所の教授が出した『官板中外新報』など、「文久新聞」と総称されるものもあるが、『官板バタヒヤ新聞』と同様、日本の新聞といえる類いのものではない。

こうしたなか、イギリスでの綿花相場を新聞から得ていたヒコが、日本人のためになる日本語の新聞を作りたいと思うようになっていた。だが子どものときに寺子屋に通ったものの、１３歳で漂流しアメリカの学校で英語を学んだヒコは、英語を日本語に訳しても、それを文章にすることができない。ヒコには日本人の文筆家が必要だった。

ヒコは横浜外国人居留地の１４１番に居を構えていた。居留地の３９番、谷戸橋畔にヘボン邸があった。後、ヘボン式ローマ字で知られるヘボンである。

望月洋子著『ヘボンの生涯と日本語』（新潮選書）によると、１８１５年、アメリカ・ペンシルバニア州で生まれたヘボンはペンシルベニア大学で医学を学び、１８４１年、お腹に子どもを宿していた妻を連れて東洋に向かう船に乗り、中国・アモイでキリスト教の伝道医師になった。いったんアメリカに戻ったが、５９年、横浜が開港したことから、横浜で伝道医師になることを決意、１０月、神奈川に着いた。

ヘボンは正しくはヘプバーン。上陸して名をなのったとことろ日本人がうまく真似られず「ヘボン」となまって呼んだことから、自ら「ヘボン」と名乗り、漢字で「平文」と署名したという。

ヘボンは神奈川宿の成仏寺に住み、近くの宗興寺で無料診察を始めた。ヘボンの専門は内科だが、日本人には眼病が多いことから、ペンシルベニア大学で学んだ通り、硫酸銀や硫酸亜鉛を使った最新の目薬を使って治療した。名医のうわさが広まり、江戸をはじめ遠方から患者がやってきた。最初のころは１日に５０人、２カ月後には１００人にもなり、東海道を行く大名行列が神奈川宿に泊まり、往診を求めるケースもでてきたという。やがて、日本人医師の手に負えない重病人も送りこまれた。ヘボンの記録のなかには白内障や痔の手術のほか、鉄砲弾の摘出や片腕の切断などの大手術も。要するにお金を取らない何でもやの医師だった。ヘボンの処方箋には３５００人の患者が記録されていた。

本稿でもふれた生麦事件の被害者のマーシャルらが領事館がある本覚寺に運びこまれたとき、ヘボンは成仏寺で親友のブルン牧師と談笑中だった。領事から呼び出されて本覚寺に駆け付けると、２人の男が血みどろになって寝かされていた。１人は肩が骨に達するまで斬られ、他の一人は背中と脇を数カ所斬られていた。ヘボンが止血かんしで出血を止めて傷口を縫合しているときに、イギリス代理公使ニールが到着。イギリス艦セント号から

岸田吟香

武装した水兵もランチで繰り出したという。

生麦事件が起きたころと相前後してヘボンは居留地に移り、横浜で商館を開いていたヒコとはすっかり懇意になった。翌６４年、江戸・深川からヘボンの診療を求めて津山藩士、岸田吟香がやってきた。吟香は眼病に苦しんでいたのだ。

吟香は『精錡水功驗書』のなかで「元治元（１８６４）年４月、眼病をわずらい、江戸でいろいろ治療したが効果はなかった。横浜にいるヘボン先生が日本に眼病が多いことをみて、なんとかこれを救おうと毎日朝８時から（午前）１０時まで眼病の治療を施したところ、一人として全快しなかった者はないと聞いた。そこで駕籠に乗って横浜に行き、翌朝先生の診察を受け、精錡水を一、二滴眼中にさされた。旅館に帰って寝ていたところかゆみを覚え、翌朝、多くの目やにが生じた。冷水で洗い落とすとさわやかな心地がした。この朝も先生の治療を受け、さらにわずか七日ほどで全く平癒した」（筆者注・文章を一部平易にした）

吟香の生涯を調べて『岸田吟香――資料から見た一生』（汲古選書）を著した杉浦正氏は、吟香は元治元の前年である文久３年に横浜に来て、ヒコの『漂流記』の序文を書いていることなどから、ヘボンとの出会いを文久３年とみる。吟香がヘボンに治療を受けに横浜に来なければヒコと会ったはずはない。元治元年にヘボンと出会ったといいうのは吟香の勘ちがいだろう。

それはともかく、吟香はヘボンに会った印象を「徳高く行い正しく君子の風があると感じた。高説を承ろうというと、先生も喜んで書斎で談笑した」と『精錡水功驗書』のなかで述べている。一方ヘボンは吟香について、後に大阪毎日新聞の記者に「書が立派で漢学ができた」と語っている。すっかり意気投合した二人の会話は日本の言語文学にまで及んだという。

『岸田吟香――資料から見た一生』によると、吟香は津山時代から学んだ和学に通じ、林図書頭の代講を務めたほどの漢学の素養もあった。そのうえ百姓、武士、町人と三つの階級の暮らしも経験している。ヘボンは和英英和辞書を作ろうとしていた。そのヘボンの辞書編集にとって吟香は二人とない存在だった。

こうして吟香はヘボン邸で暮らすことになった。
吟香は横浜滞在中にヒコと知り合い、ヒコの『漂流記』出版に協力し、新聞発行の約束をしたものと思われる、と杉浦氏は推定している。二人が出会ったのはヘボン邸だったことはまぎれもない。ヘボンはヒコが新聞をつくりたいと思っていたことを知っていたのだろう。

杉浦氏は著書『新聞事始め』（毎日新聞社）のなかで、

本間潜蔵

ヒコ、吟香、本間潜蔵との会話を次のように書いている。

「どうでしょう、三人で新聞を発行してみませんか」とある日、ヒコが提案した。

「これからは貿易が盛んになることですし、物価や政治情勢を知らなければ商売できなくなるでしょう。きっと世のためにもなると思います」

吟香はもちろん希望していたところだったし、若い潜蔵に否やはなかった。

ここに登場する本間潜蔵は掛川出身。『ジョセフ・ヒコ』によると１４歳のとき駿府で学んだ後、英語を学びたくて横浜に出てきた。ヒコが新聞をつくるさい筆記方を探し求め、出入りの洗濯屋にも頼んでいた。本間は洗濯屋とも顔見知りだった。本間自身、外国にいける便宜を探していたこともあって、洗濯屋の勧めで筆記方としてヒコに雇われたという。

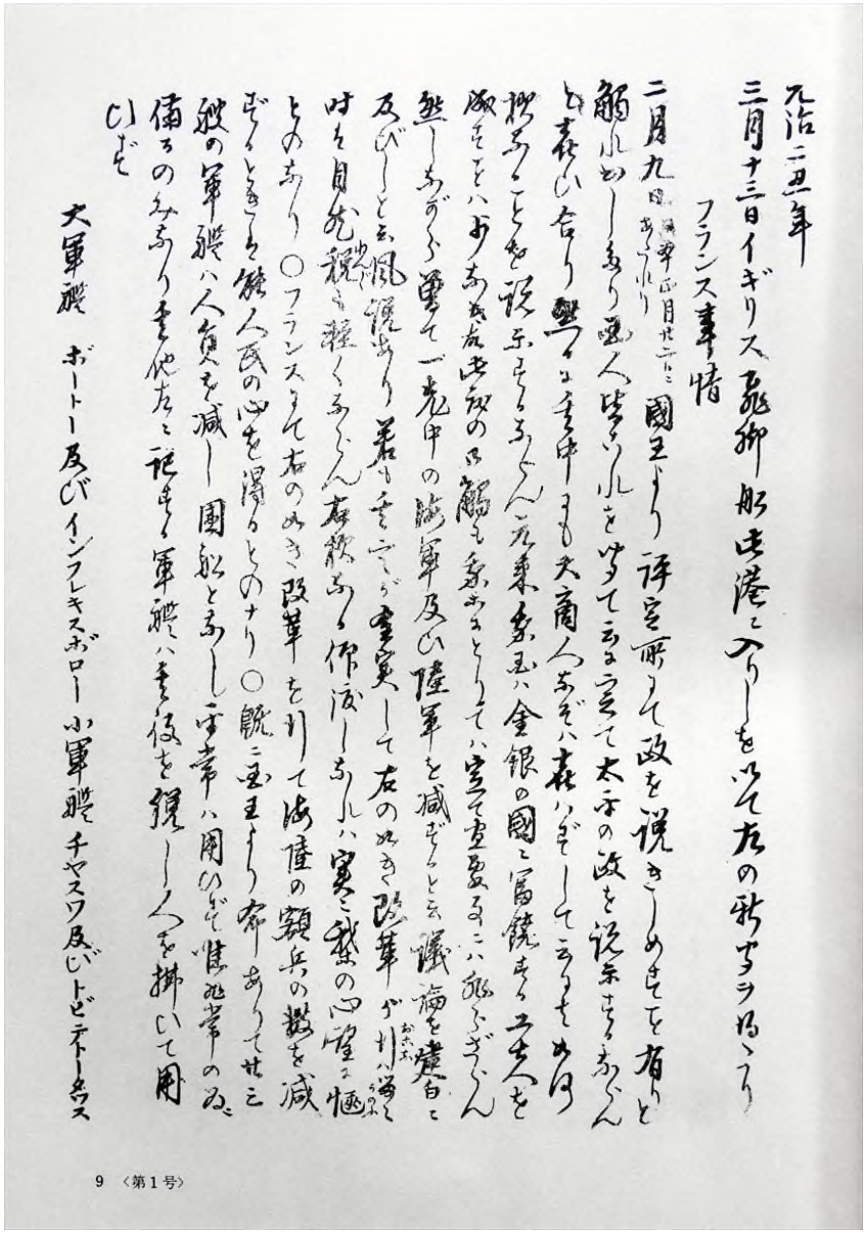
こうして３人で新聞づくりにかかることになった。

謎多き新聞創刊

ヒコは自身がつくった新聞について『自伝』の元治元（１８６４）年6月２８日の項で「今月中に、私は『海外新聞』を創刊した。木版刷りの日本語新聞で、外国のニュースを要約してのせている。これは日本語で印刷された最初の新聞であった。この新聞は私が長崎へ去るまで――約二年間つづいて刊行された」と記しているにすぎない。このあっさりとした文書から「日本で最初の新聞」の発行者としての高揚感はうかがえない。ここに書かれているように、新聞が２年しかつづかなかったことへの申し訳ない気持ちがあるからなのかもしれない。だが、ヒコがつくった新聞はまぎれもなく、我が国ジャーナリズム史上エポックをなすものと高い評価を受けている。

ヒコが多くを語らない以上、吟香に説明してもらうしかない。『岸田吟香――資料から見た一生』のなかで、吟香が１８９３年、「朝野新聞」の中村鶴城記者に語った言葉が紹介されている。原文のまま掲載する。

予も曾（かつ）て新聞紙の有益なることを信じ居たるが、其刊行の方法を知らざりしに、彦蔵の勧めに依りて愈々（いよいよ）之を刊行せんことを思い立ち、即ち彦蔵は西洋の新聞紙中より珍しき出来事を翻訳し、予と本間氏とは之を平假名交りの日本文に綴りたり、されど其の頃は今日の如く活字等は一切なければ、予等自ら板下を書きて之を木版に刻し、半紙五、六枚にて單に「新聞紙」と表題を附し、月に三、四回づゝ刊行して自ら之を横濱市内に配達したり、是れ元治元年甲子の歳にして実に日本帝國に於ける新聞雑誌の元祖というべし。



元治二丑年
三月十三日イギリス亜船横浜ニ入津ヲ以テ左の件々ヲ報ス
フランス事情
二月九日（西暦三月廿六日ニ当ル）國王より詔を降して政を視ることを有ると雖も一切の人事ハ皆ナポレオン第三世の令旨ニ出ると雖も大商人ならびニ富豪の人ハ皆ナポレオン第三世を敬ふことを敬ふるよりも尚甚しく金銀の國と富饒なる之を敬ふことハ勿論なり而して貧窮の人ハ之を敬ふことハ勿論なりと雖も実ニ之を畏るゝニハ如かず兵隊ハ一万人を減じ一國ニ兵士三十万人ハ國の為ニ備ふるのみなり之を以て兵隊ハ之を減じ人を撰んで用ひざるなり
大軍艦　ボートー及びインフレキスブロー　小軍艦　チヤスワ及びトビテトー名ス

9 〈第1号〉

海外新聞第１号の最初のページ

ヒコは『自伝』のなかで発行した新聞を「海外新聞」といい、吟香は中村鶴城記者に「新聞紙」と述べている。いずれも発刊は元治元年だという。

いったい元治元年に我が国で初めてつくられた日本語新聞は「海外新聞」なのか「新聞紙」なのか、それとも後述する「新聞誌」なのか。この問題にメスを入れたのが近盛氏だ。吟香が後にバン・リードと『横浜新報もしほ草』を発行したさい、その創刊号に「曩（さき）にヒコサワの新聞誌ありしか」と書いていることなどを根拠に、『海外新聞』が最初は「新聞誌」と題されていたことは幕末・明治のころから明らかにされていたとする。それではなぜヒコが「新聞誌」といわなかったのか、また吟香はなぜ中村鶴城記者に「新聞誌」でなく「新聞紙」といったのか、という疑問が残る。

後者については、吟香がもしほ草創刊号の冒頭の言葉のなかで「蓋（けだ）し新聞紙の世に益ある事をしるものすくなき」と述べていることから、近盛氏は「新聞誌」は固有名詞、「新聞紙」は普通名詞として使い分けているとみる。しかし吟香は中村鶴城記者には、「『新聞紙』と表題を附し」と語っている。この表現からみれば、「新聞紙」を固有名詞として使っているとしか考えられない。

吟香の言葉だけでは疑問は解消されない。近盛氏が『ジョセフ・ヒコ』の中でこの疑問に次のように応えている。『海外新聞』の前身が「新聞誌」と題したものであったことは、政府の公式記録にも載せられている。明治１９年９月に内務省総務局図書課が出した「図書課目録　新聞雑誌之部」の『海外新聞』のところで「旧名・新聞誌」とハッキリ明示されているのがそれである。

近盛氏の主張を認めるしかないだろう。高橋康雄著『メディアの曙――明治開国期の新聞・出版物語』（日本経

絵のない「海外新聞紙」の表紙

済新聞社）でも「元治元年６月、本邦初の手書き新聞『新聞誌』が刊行された」とあり、当然のごとく『新聞誌』としている。だが現物を見ないことには納得できない。後で述べるが『海外新聞』は２６号まで刊行され、その全てが『ジョセフ彦　海外新聞』（早稲田大学図書館資料叢刊２、早稲田大学出版部）に収録されている。そのなかに『新聞誌』と書かれた表紙の写真が掲載され、キャプションには「西垣文庫本によった」とある。そして、「『新聞誌』の本版の表紙として現存する唯一の文献資料。本間清雄の筆で、『海外新聞』の表紙と全く同じ筆跡であることに注目したい」との説明がつけられている。

本間清雄は本間潜蔵と同一人物。ページを繰ると『海外新聞紙』の表紙の写真を扱っていて、「文字は本間清雄の筆」とある。

「西垣文庫」というのは日本新聞資料協会会長だった西垣武一氏の所蔵であることを指す。１９４０年、朝日新聞社が開いた「日本文化史展」に出品されたもので、後、神田の古本屋から売りに出されて西垣氏が買い取った。

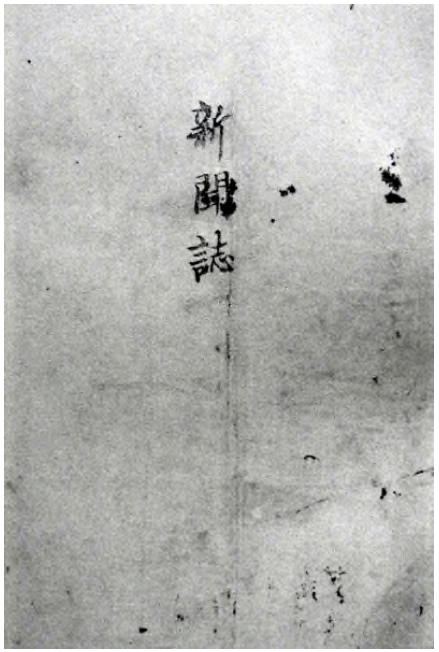
近盛氏は「木版・海外新聞・第４号」と全く同一の「木版・新聞誌・第４号」であるという。

さらに『ジョセフ彦　海外新聞』のページを繰ってみる。松平春嶽文庫本（福井県立図書館保管）には第１号から第４号までは『新聞誌』、この後、号数のない『海外新聞』になる。一方、松井文庫本（熊本大学図書館所蔵）では第１～第３号は『新聞誌』、第４号は『海外新聞』。

これらを総合すると第１～第３号までは『新聞誌』、４号は『新聞誌』と『海外新聞』があり、５号から『海外新聞』にまとまった、と読める。だが『ジョセフ彦　海外新聞』に収録されている『海外新聞』の第１号の表紙は富士山と横浜港があしらわれ、題字も横書きで「海外」その下に縦書きで「新聞」とあり、松平春嶽文庫本や松井文庫本の第１号の題字だけで絵がないシンプルなスタイルとは全く異なる。本文だけ木版で刷り、表紙は題字だけで絵がない『新聞誌』や『海外新聞』、絵がある『海外新聞』が混在していたということだろうか。

もしそうならヒコが『自伝』のなかで『海外新聞』しか挙げなかった理由がはっきりする。ヒコは『新聞誌』の意識は余りなかったのだ。

もう一点の問題は『海外新聞』の第１号の冒頭「元治二丑年　三月十三日イギリス飛脚船此港ニ入りしヲ以て左の新聞ヲ得たり」と、発行年月を元治２年としていることだ。元治２年６月は慶応元年にあたり、「慶応元年創刊説」の根拠になっている。しかしヒコ、吟香のほか本間も元治元年に故郷の掛川で『新聞誌』発刊に関する漢詩を作っているうえ、明治９年修史局が出版した『明



西垣文庫本による「新聞紙」の表紙

治史要』に「新聞紙　元治元年　横浜」とあることなどから、杉浦氏は元治元年創刊は明らかとする。

ここでまた一つの疑問にぶつかる。『海外新聞』の第１号が元治２年の発行であることは明らかだから、元治元年に発行された『新聞誌』（あるいは絵のない表紙の『海外新聞』）は全く別物である。それはどのような新聞だったのだろう。

『岸田吟香――資料から見た一生』は、八戸市立図書館所蔵の「八戸藩南部家資料」に収録された、「新聞紙」と表題がついた和とじの冊子を取り上げている。それによると、表紙には中央に大きく「新聞紙」、その右肩に小さく「元治元年八月」とあり、すべて筆写されたものだ。

本文は①アメリカ軍艦ターキア号に乗り組んだヴァン・リードの「長州・外国戦日記」②「長州・外国戦争日記」③「増補新聞抜書」など７項目からなっている。このなかに「悪逆なその御家老を捨置きて　さて水戸もなく御処置成りけり」などの長州や水戸を風刺した落首もあり、その内容は興味ぶかいものだが、ここでは深入りは避けよう。当初の『新聞誌』がこのような内容のものでつくられたならば、「外国のニュースを要約してのせる」というヒコの編集方針とは全く反している。これは第２号であって、第１号は海外ものだったとでもいうのだろうか。考えれば考えるほど、私の思考は泥沼のなかに落ちこむ。

つまるところ、ジャーナリズムとしての混迷期のなか、我が国最初の新聞が産声をあげた、とみるしかない。

いささかベールに包まれているが、我が国初の新聞は元治元年６月に発行された。表紙は木版、記事は手書き、半紙５、６枚分の和綴の和本スタイル（冊子体）だった。ヒコが口述し、吟香がそれを文章として体裁を整え、本間潜蔵が和紙に筆者したのだ（『メディアの曙』）。

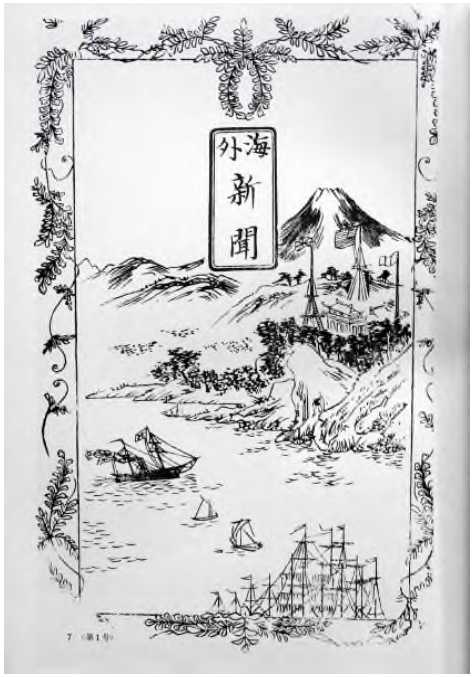
子どもにも読める新聞

吟香は『新聞実歴談』のなかで「彦蔵ハ西洋ノ新聞紙中ヨリ珍ラシキ出来事ヲ翻訳シ予モ本間氏トハ之を平假名交リノ日本文ニ綴リタリ」と、平仮名で表したことを強調。『海外新聞』第２号では「童子之輩にも読なんことを欲す」と子どもにも読める平易な文章の新聞を目指したことを示している。

では、実際の新聞はどうだったのだろう。

以下に引用する文章はすべて『ジョセフ彦　海外新聞』に収録されている『海外新聞』によっている。

各号とも、すでにふれた第１号の冒頭の「元治二丑年三月十三日イギリス飛脚船此港ニ入りしヲ以て左の新聞ヲ得たり」のように、郵便船が入港した年月日を記載し、フランスの部、イギリスの部など国別に記事が掲載



富士山などが描かれた「海外新聞」表紙

されている。最後に「各国の新聞誌を日本のこと葉になほし出す趣意ハ各国の珍敷噺をも知り且物の価の相場高下をも弁へ知れハ貿易の為に弁利多きを思い」と新聞発行の目的を記載。第５号からは「若し見むと要する諸君子ハ横浜第百四十一番を問い給へ。遠くに帰りし諸君子ハ書中に御姓名と御住所をしるしておくりたまへ。早速郵便にて呈すへし」と、問い合わせ先や郵送する旨を書き、最後に「壱部買ハ五百文、前銭にて壱年仕切ハ金壱両弐分也」と値段を示した。１部５００文、年間購読は前払いで１両２分。後述するが、この購読目論みは全くの絵に描いた餅に終わる。

すでに述べたように『海外新聞』は「慶応二丙寅年九月二十八日」に入った新聞によって作られた２６号まで発行されたが、全体を通して海外ニュースは戦争、外交、政治、事件などの社会事象、相場に分けられる。ここでは戦争、政治、社会事象にかかわる記事を概観し、相場については次項で検討したい。

（原文で漢数字のものも洋数字にする）

【戦争】
第６号（慶応元年５月２６日着船便）
アメリカの部
４月６日南北戦争ありて南部大いに敗北し将軍イユウヲェルを始５人の将軍ならびに兵卒５００００人程生捕れ大砲１４挺奪ひ取られるとぞ〇同７日北部将軍グラントーより南部将軍リイーに書面をつかハしていひけるは、汝たとへ死力を尽して戦争せんと欲するも必ず力及ぶまし。それより早く降参なすかた宜しかるべしとぞ申送りける。
第８号（慶応元年閏５月２６日着船便）
アメリカの部
南部将軍ジョンストンを始として一坐に連なる大将ブレケレンジー。ボレカール。ハーリー及ひ小役士卒等都合２万７０００人何れも猛威に恐れ言を揃て降参したりける〇南部役人テーラーは北部役人ケンベー江降り、大将コーベースメットはアカガワに於て降り、軍艦掛り老中はヘニンセコークにて北将軍ゲブシンに降服す。南キャライナの奉行は捕となりワシントンへ被送る。
第９号（慶応元年６月１５日着船便）
アメリカの部
英の５月３５日（ママ）附のニューヨルクの新聞紙に南部大頭領はフヲツレスマンローという台場の牢屋江容れられ多数の番を相添江厳重に守り居候由。又アルフトロスの新聞紙にてハ彼の大頭領ハ重罪により足かせの難に被苦置其家内一族の者等ハ南部江送らるるといふ。
第１７号（慶応元年１２月１２日着船便）
英国之部

１８６５年１１月２７日の新聞ニ記載しにハ、イスハニア国南アメリカ之内チリヤ国との戦ニ及と云事に付此国ニおゐて許多の大商人集会忝談して言く。我国の内の商人多分チリヤ国へ貿易之ため在留の者あり。今両国戦争ニ及れてハ我国貨（貿）易之障りニもなるべし故政府江難渋之趣き願出し両国和睦ニ相成べき様取扱被成下と申出たり。時努宰相より請取てイスハニア国ノマトラアスと云う城下江即刻ニ送りたる由なり。

【外交】

第３号（元治２年４月１２日着船便）

フランス国之部

３月９日プロヰスの或新聞に、此国之国王自筆の書面をコンシェルに命してサヤマ国（印度の内之一ケ国也）の国王に贈りし始末を左記如くに記せり。扨右之書面を金の花入れの中に入れ、サヤムより来たる結構を尽して飾り立たる迎舟に載せ、其外４０艘の警備舟従て彼之国に趣きたり。

スペイン国の部

３月２日、マーシロナーバーズ（人名）より評定所江ビルー（南アメリカ国の内）と討論之事を始めて条約を結ひし書面を差出したり。

第９号

イギリス国の部

６月１０日合衆国より遣置しミニュストル、アタムスより英の政府江次官を以て応接あり。其故ハ先年英国と合衆国和親をなし追々約に背き互に謀計無之様堅く誓をなし夫レのみならす譬ひ両国に而他の国と戦ありとも他の国江加勢等をなす事なからんことを約せり。

第２４号（慶応２年８月２５日着船便）

イギリスの部

此国７８年前よりアメリカ国まで海底に３千里ほどの所テレガラフを仕掛て音信を通ハすことを作り初しが此頃漸やく海底に相成しによって女王よりアメリカ国の大頭領まで賀詞を申おくるハ、此テレガラフの線縄首尾よく成就して貴国まで達貫せしによりてハ此繋縄をもって是迄よりも猶一段懇篤に交親らんことを翼望せんと。大頭領より答ひにハ、忝く承知セリ。

【政治】

第１号

プロヰセン国の部

プロヰセン国の人民租税の重きを苦しむと云説あるにつき、其国の評定所にて其掛りの役人取調のことを始めたり。然して其調への上にて如何様なる法に改革なさんと云ことを衆議なし居れり。

第３号

オランダ国之部

３月８日、太后年７０才にて逝去せられたり。是によって国中之者慎ミ居れり。

第５号（慶応元年５月１１日着船便）

イギリス国の部

３月２７日大評定所（諸大名集会の場所）に於或一人の大名此国総ての属国取締り手立の法につき自ら存寄を申出せしには、属国の国々ハ其自国にて海軍を調へ自ら守備をなし且入用も其国にてとり扱ふやうに成さば弁利ならんと。

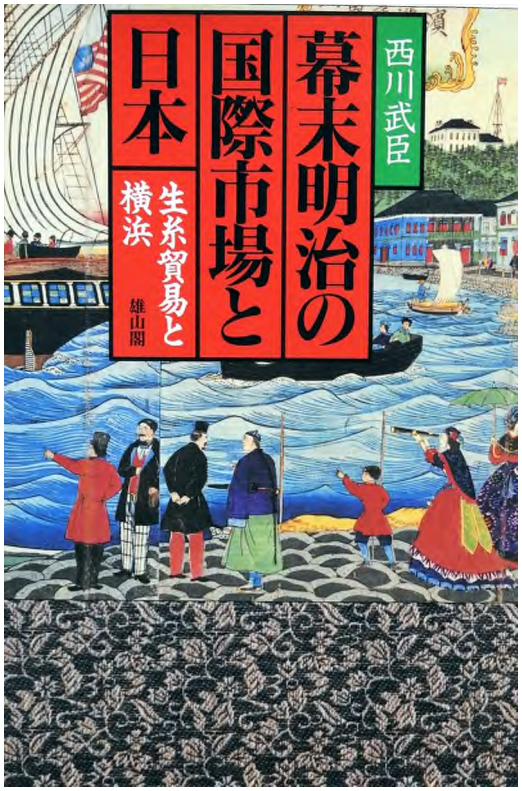
第１５号（慶応元年１１月６日着船便）

イギリス国の部

英の１０月２６日新聞ニ云く。今月１８日大老職パアムストンと云人、風気より重りて卒去ありしとかや。宰相ニなりてより権畏を用ずして国政日ニ盛んにして人民

多くなつき上下和睦する事殊に大なり。電信機を以テ卒せられたるを国中に触れ知らせしに士農工商四民ともニ愁傷して其業を休め戸を閉ちて静なる事鳴物停止の如し。
第１６号（慶応元年１１月２１日着船便）
イギリス国の部
　英の１１月１０日の新聞紙ニ記載せしニハ此国の大老ハアムストン卒せしに依て是迄時務宰相分勤められたるロストー大老職に成られたり。キラントンと云う人時務宰相に上られたり。
米利堅之部
　大頭領の意ざしハ是迄官吏重役の入札ハ黒人ニ此入札到させざるを改而始るにハ一度入札致させてハ宜しからさる間、本を定めて追々入札致さすへきとなり。
第１９号（慶応２年５月５日着船便）
アメリカ国の部
　評定所にてある評定あり。其事既に定りて大頭領へ持出せしに大頭領ハ之を承知せず返されたり。依て再び評議之上入札なりしところ３３と１５、１２２と４１と札入れたり。たとい大頭領ハ国躰に違といふて承知なさらずとも右之入札にて大頭領の印ハなくとも直ニ国法となれり。衆説二、若し大頭領之ニ印を押すことを敢せざれハ不得止大頭領の位を去らしむと。
【事件、社会事象】
（リンカーン大統領暗殺事件は前号で取り上げたので本稿では省く）
第３号
イタリア国の部
　ネーフルスと云城下の新聞に記せしイタナー山未タに硫黄を吹き居れり。夫れを見たる人語りしに、思ひしよりも畏敷有様にて、其辺に近づく時は其響きは恰も雷の轟く如くにて、吹きだす硫黄の熱湯は一里も二里も流れ渡れり。是迄平地なるものも俄に山と成り、林或は田畑なぞは黒き荒地と成れり。憶ふに、今より１００年も歴されバ穀物等の植えつけの成るよふには成る間敷成らん。
第１８号（慶応元年４月１７日着船便）
　４月１０日にアメリカ国の商人ピーボルトといふ人ロンドン市中の貧しき人民に洋銀５０万元をほとこしたり。其しさいを尋るに此人永くこの地にありて広く商賣をなし、かく富しことをかたじけなくおもひ其徳にむくはんとの心より出しことなりとかや。此事たちまち女王の耳に達し深く其志を感じ時務宰相を以て厚く礼を述へ親らの肖像を゙がきてこれを謝礼のしるしとなさむといいおくりし。
第２６号（慶応２年９月２８日着船便）
イギリス国
　チュタムと云地に船の鑁場あり。其船中熱気の釜破裂して二人即死、怪我人３０人計りしとぞ（これそのかかりの者の油断にて釜中の沸騰焦涸せし也と云）。

　以上は『海外新聞』の１～２６号から抜き出したものだが、全体からみれば一部にすぎない。しかし、ヒコがどのようなことに関心を示していたかは十分推察できる。項目ごとに分析してみよう。
　戦争については、南北戦争の最中にヒコ自身がアメリカにいたのだから、その動向に注意を払っていたのは当然だ。本稿には出さなかったが、『海外新聞』ではかなり細かく戦争報道を伝えている。前号を執筆したさいに、同戦争に関する書物にも目を通していた私でさえ知らな



『幕末明治の国際市場と日本―生糸貿易と横浜』

い地名や氏名が登場する。吟香や本間は筆記に際してとまどったに相違ない。スペインとチリの間の一触即発状況にもヒコの目は向いていたようだ。

外交について、二つの国の条約締結にヒコの関心がいくのは、アメリカ領事館の通訳官をしたヒコとしては当然のことだろう。だがむしろ国王の動きにも興味をもっていたことに注目すべきだろう。「尊王攘夷」が叫ばれるなか、ミカドの存在にも注視していたことが『伝記』からうかがえる。このことは次号でふれたい。

政治に関して、国会を評定所、首相を大老、国務大臣を時務宰相、知事ら地方政治のトップを大名と言い換えるなど、日本人にも理解できるように工夫したことがうかがえる。あるいは吟香の知恵だったのかもしれない。

電信を実際に使う場面に出合った最初の日本人がヒコではないか、と前々号でふれたが、その電信が海底ケーブルを通じてアメリカとイギリスの間で結ばれたとの報にヒコは感慨を新たにしたのではないか。欧米文明が驚くほど進んでいることをヒコは訴えたかったにちがいない。

注目したいのはアメリカの大統領が黒人の参政権について意見を述べている点だ。リンカーン大統領に会ったただ一人の日本人であるヒコだが、『自伝』には奴隷解放については何の記述もない。だがヒコはこのことに全く関心がなかったのではないようだ。

事件・社会事象としてイタリアの火山噴火に目を奪われたことは意味深い。ヴェスヴィオ山の噴火で古代ローマの都市ポンペイが地中に埋まったことを、キリスト教の学習の際に知った可能性があると思われるからだ。洗礼を受けたキリスト教徒ヒコの一面がイタリア火山噴火の紹介記事のなかに現れているといえなくもない。

本稿の本筋とはいささか外れるが、吟香が子どもにも読めるように留意したという『海外新聞』。その文章は現在の大人でも読み切るのは容易ではない。もしこれを幕末の子どもらがスラスラと読めたとしたら、その読解力に驚く。寺子屋で「論語」などを暗唱させていたことによるのかもしれない。

時代画す生糸相場情報

ヒコは『自伝』のなかで、『海外新聞』の性格について、日本人のために「輸入品」、「輸出品」の現地における「今日の値段」を知らせる新聞、と述べている。前項でみたように、戦争、外交から事件・社会事象などさま

生糸

ざまな分野の海外ニュースを提供してはいるが、ヒコにとって一番の眼目は相場を伝えることだった。それはすでにふれたように綿花相場に着目したからだが、綿花取引が終息した後､彼の目はおもに生糸相場に移ったように思われる。元治元年９月２０日の『自伝』の以下の記事がその根拠だ。

幕府が「生糸を生産地から直接横浜に送らず江戸の問屋に送り、問屋がその等級に従って価格を決める」と通達したことを､横浜の日本人絹商人が外国商人に伝えた。外国商人たちは自国の代表に不満を申し入れ､イギリス、フランス、オランダ、アメリカの連合艦隊は江戸まで出かけて圧力をかけ、各国公使団は「条約に反する」と貿易干渉に抗議した。幕閣がこの法令を取り消したので、生糸は今まで通り横浜に出ることになったが、開港場ゆきの絹はことごとく神奈川で荷揚げされ、そこから馬で運ぶことになった。

上記の江戸送り通達というのは１８６０（万延元）年に発せられた「五品江戸廻し令」を指す。生糸、油、雑穀、蝋、呉服の５品について、「江戸への入荷が減少すると品が欠乏して人々が困る」との名目で、江戸の問屋の独占権を擁護しようとしたものだ。

『横浜市史』によると万延元年の上半期に日本から輸出された産物は、生糸２，５０７ピクルス（７６２，５２９ドル)、油６５，２０５樽（２２６，４２７ドル)、銅７，９３５ピクルス（１５３，７８２ドル)、茶９，３２４ピクルス（９４，３８９ドル)、種子６６，４０４ピクルス（７０，４４３ドル)、干魚１１，３２６ピクルス（４３，１５１ドル)、薬品１１，１７８箱（４１，８１２ドル)、絹織物２５１反（３０，２２０ドル）＝１ピクルは約６０キログラム＝などとなっており、生糸が圧倒的な稼ぎ頭だった。

「五品江戸廻し令」には内外から強く反発されて無力化し、元治元年９月、貿易統制の中止を公布、横浜での貿易が発展することになった。なかでも大きく伸びたのが生糸貿易。西川武臣『幕末明治の国際市場と日本-―生糸貿易と横浜』（雄山閣）によると、横浜開港翌年に２５９万ドルだった生糸輸出額は１８６５（慶応元）年に１４００万ドルにも達し、日本の代表的な輸出品となった。

生糸輸出量の急増理由としてヨーロッパの主要産地であるフランスで１８５０年代から６０年代に蚕の病気が流行したためといわれている。加えて、フランスの模様織に代表される高級絹織物からより安価な絹織物が求められるようになり、アジア産生糸の需要が高まった。なかでも品質がよい日本産生糸が求められたといわれている。

では『海外新聞』が生糸相場をどのように伝えたかをみておこう。(いずれもイギリスでの相場状況。支那はすべて中国に変更)

第１号

織工にて価を高くなすとの故中国サタリー糸の上物に

て、壱斤につき価六枚七分五厘位、日本の前橋のものにては英国の壱斤につき七枚七厘位。
第３号
　中国のサタリーと云宜敷品は変りしことなけれども下物は向き悪しき故。此頃着きたる糸は下物多し。日本前橋之糸は少しく売買ありしか価を引下げ壱斤につき元と直よりもドロ二分五厘程下げし。此節は宜敷入荷なし。故に尽くつきし〇後月一月に入荷ありし糸ハ中国二千三百十二箇、日本八百八十九箇也。此頃飛脚船より申来りしに中国との荷を合して中国より積出せしもの三万三百箇なりとそ。
第４号
　上の品甚少し。是に依て競気は少しく宜き方なれとも、直段ハ已前に変りしことなし。
第５号
　中国の上品直段ハ極く高きところ迄上りたり。並に日本のものも然り。中国上品一斤につき凡七枚一分位、日本前橋極上凡七枚五厘位なり。
第６号
　前橋の極上は競気少しく宜し。其故ハ上物の品ハ甚少けれバなり。朔日より廿四日迄に売買ありしハ中国之品千八百四十五箇、日本の品二千六百六十九箇なり。人々云合るにハ日本の糸ハ当節製法麁末になりて品甚だ下りたりと。
第７号
　上品甚少し。夫レニ付競気少しくよろし。
第８号
　日本と中国の糸極上は甚少し。併相場の義は前之新聞より少く景気よろし。
第１０号
　当年（１８６５年）は欧羅巴中甚不出来ニ付、且は入荷も少ニ付日々直段よろし。
第１１号
　弥よ払底にして価極而高し。凡そ三拾年この方この直段なり。尤も日本前橋中国サタツリー等の品何れへも向よろし。
第１２号
　如前
第１４号
　直段甚タ尊し。
第１５号
　中国日本共上品は価高して入用も亦多し。
第１６号
　前橋最上品入用なり。中国も上品は高値なり。
第１７号
　南京の品能く売れ直段益々高し。日本も直段吉而入用なり。併陸揚したる日本生糸直段高直故今ニ不売。
第１８号
　前の新聞とかわりなし。
第１９号
　買人多くあり。然し価は前の通り也。此故ハヨーロッパの蚕虫少しきやうす悪しく見ゆるなれバ也。然しいまた時早き故其たしかなることハ分りがたし。中国之品ハ多く売買あり。日本品ハ沢山あれとも多くハ品あしき故うれ悪し。然し前橋の極上ハ売買あり。
第２０号
　ヤウロッパにて専ら宜敷見込なり。直段ハ前の新聞と替る事なし。
第２１号
　入用減し売買も又少く、前橋糸凡三十より三十三シリ

幕末の横浜港

ングなり。
第２２号
売買なし。
第２３号
中国の品廿八より廿九シルリング、前橋之品廿九より三十シルリング迄。
第２５号
値段よろし。
日本糸別してよろし。
第２６号
競気よろし。価七日の間に百斤に付三十枚増加ならびに中国当年の産不宣旨なり。日本前橋三十二より三十五シリング。

ヒコが「今日の値段を知らせる新聞」と大見えを切った割には物足りない。ヨーロッパではイギリスのロンドン､フランスのリヨンを中心に生糸相場が形成されたが、ヒコがその現場にいたわけでなく、イギリス発行の新聞に頼るしかなかったのだからやむを得ないだろう。十分ではないとはいえ、いくつかの示唆に富むデータがうかがえて興味深い。一つは中国物は品質が悪く、日本物の需要が高まった、との見方は必ずしも当っていないのではないかと思われる点だ。アヘン戦争や太平天国の乱などで、品質が落ちたのは事実だが､「中国の上品直段ハ極く高きところ迄上りたり」（第５号）とあるように、中国産も上物はやはり品質は良好だった。

もう一点は前橋物の相場をヒコが強く意識していたことだ。前掲の『幕末明治の国際市場と日本』によると、万延元（１８６０）年以降、仙台、守山、沼田、勝山、前橋などの各藩が海外貿易に進出。なかでも、開港以前から生糸生産が盛んだった前橋藩は、文久元年に藩専売を実施し、貿易に積極的に乗り出した。前橋町は日本有数の生糸の集散地になり、各地から生糸が入荷した。この結果、藩が出荷する生糸が多くなり､「前橋糸」と呼ばれる生糸が貿易全体に対し大きなシェアを占めるようになった。

幕末から明治初年に前橋藩が出荷した生糸の量は年間５３５０箇に達したとの記録もある。この糸を扱う売込商は文久２年、遠州屋、野沢屋、吉村屋、大橋屋、永喜屋の５軒に限られることになった、このうち吉村屋は１８６８（慶応４）年､扱い生糸総額が１００万両を超え、横浜でも一、二を争う巨大売込商に成長。時代が少し後になるが、明治９（１８７６）年に吉村屋が輸出した生糸の量は、総輸出生糸の１７％以上に達した。筆者の西川氏は「吉村屋が作り上げた生糸の集荷体制と輸出機構が、その後の日本の生糸貿易を支えていったかの感があるといっても過言でない」と述べる。

その吉村屋が横浜に吉村屋幸兵衛店を開いたのは文久二年。慶応４年、吉村屋の番頭は本店への書簡のなかで「当地糸相場極上物ますます気配よろしく、相応の高直売込相成り」などと売れ行きが好調であることをしたためている。

「よこはま新報もしほ草」第一編

一方、『海外新聞』で前橋糸が登場するのは第６号（前橋の極上は競気少しく宜し。其故ハ上物の品ハ甚少けれバなり）、第１１号（日本前橋中国サタツリー等の品何れへも向よろし）、第１９号（前橋の極上ハ売買あり）、第２１号（前橋糸凡三十より三十三シリングなり）、第２３号（前橋之品廿九より三十シルリング迄）、第２６号（日本前橋三十二より三十五シリング）と６号分にわたる。この相場情報を吉村屋の番頭は知っていたとみるべきだろう。ヒコは『自伝』のなかで「数多くの日本人が私の職場をおとずれた。みな熱心に外国のニュースを知りたがっている」と語っている。ヒコのところに顔を出した一人が吉村屋の番頭だった可能性は高い。

明治に入ってからの生糸の輸出量は明治４年１３２万３０００斤、明治１０年１７２万３０００斤、明治１５年２８８万４０００斤、明治２０年３１０万３０００斤、明治２５年５４０万６０００斤と伸びている。このうち横浜港が占める割合は明治４年９４・６％、以降は１００％（『横浜市史』）。幕末から明治にかけての輸出生糸のほとんどは横浜港で船積みされたのだ。言い換えるなら、近代シルクロードの起点はヨコハマだった。

明治５年に官営の模範製糸場として富岡製糸場がつくられるなど、生糸が明治経済の一翼を担った歴史を思うと、生糸相場を書きいれたことこそ『海外新聞』の真骨頂といえるだろう。

もしほ草と横浜毎日新聞

岸田吟香は『海外新聞』の後述筆記の一方で、ヘボンが進めていた英和和英辞書の編集協力をしたことはすでにふれた。いよいよ印刷段階に入り、ヘボンは横浜居留地で印刷できないかと、文久２（１８６２）年から漫画誌を発行している英国人らに相談したが、日本式の木版刷りではとてもムリとわかり、上海で印刷しようと決断。慶応２（１８６６）年９月、妻クララと吟香を伴って上海におもむいた。

『ヘボンの生涯と日本語』によると、ヘボンは漢籍キリスト教本などを出版している「美華書院」で、吟香が書いた５ミリ角の日本文字を基に鉛活字を鋳造させた。１カ月後、特別注文の新活字がほぼそろい、ローマ字、漢字、カナ、英語の順に並べていく作業に入る。１日に４ページほどしか進まない難業だったが、翌年４月、ついに完成。辞書名を『和英語林集成』とした。厚さ５センチ、７００ページの大著だった。

吟香はヘボンとともに５月１７日、上海をあとにした。

和英語林集成 部分

『和英語林集成』は我が国の英語教育や普及のうえでエポックをなす辞書となったが、同辞書の紹介は本稿の目的ではない。ヒコの片腕であった吟香が横浜を留守にしたことは、否応なく『海外新聞』づくりに影響した。

それでなくとも経営は火の車だったと思われる。ヒコは『自伝』のなかで、「奇妙なことには、日本の民衆は、その新聞を読みたがってはいるが、どうも当時の政府と法律のせいで、予約購読したり買ったりするのを恐れていたらしい。そこでやむを得ず、大部分をただでやる始末だった」と愚痴をこぼしている。そして「定期購読者はわずかに肥後のサムエライ（ショームラ）が一人と、もう一人は九州の柳川の役人（ナカムラ）ばかりであった」と告白する。これでは採算が合うはずはなかった。「慶応２年９月２８日着船便」による第２６号を最後に、ヒコは『海外新聞』を廃刊にした。

この年１１月、横浜が猛火に包まれた。おりからの南西の強風にあおられ、日本人町の半分と居留地の４分の１が丸焼けになった（『自伝』）。ヒコの住居は焼けなかったが、この火災が横浜を引き払う決意をさせた。１２月、長崎に向かう。長崎時代のヒコについては次号で取り上げたい。

さて吟香である。『海外新聞』は廃刊になり、『和英語林集成』も完成したが、おとなしくしている吟香ではなかった。ヘボンと帰国した３月後の慶応３年８月、精錡水の販売を始めたのだ。

吟香がヘボンから目の治療を受け、精錡水を差してもらうと完治したことはすでに述べたが、この販売を思い立った動機の一つが『海外新聞』に掲載した広告にあったと思われる。

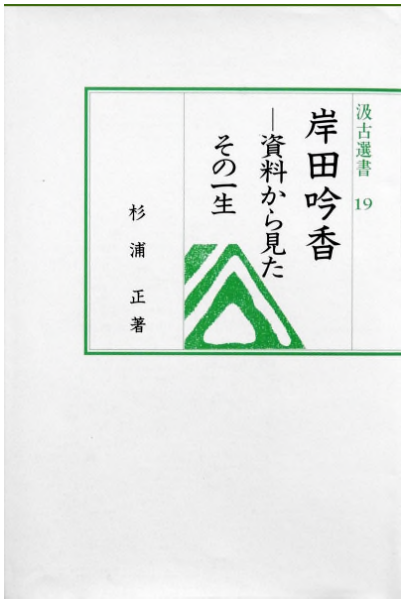
『海外新聞』の第２号に「横浜在留之異人より出す引札等をも訳して添可申候」と、外国人が出す宣伝広告も掲載することを発表。第１８号になってようやく引札之部として宣伝広告が載るようになった。以下の三つの広告だ。

「薬種類を求むと要する諸君子ハ、運上所の脇なる第二十五番を問い給へ（以下略）」

「病の治療を受むと望む人々ハ、爾後九ツ半より七時迄に第百八番をとい給へ」

「長崎に於ハ、ワーラス組、横浜にてハ、ワーラスホール組。我等ハ、アメリカ国の商人にて日本開港以来店を開きて日本の品も買入れ又舶来の品も売る。若し帆船蒸気船其他蒸気の器械及び軍用の諸器と日用の器物など誂たき諸君子ハ来り給へ。無相違本国又ハ外国よりも取よせ可差上候。我等の右二軒ハ日本政府及び大明へも聞へ、江戸大坂の町人へも聞へ居り。住宅は海岸二番なり」

第１９号からは「入歯を成さんと欲する御方ハ御尋被下（以下略）」との入れ歯広告が入り、第２０号からは「アメリカの商人オールマンブラウ組ハ当地開港已来店出し居り候。蒸気船帆前船海陸之大小砲玉薬類等御望ニ候ハ、御尋下度候。ブレイキレーもと込め所持いたし居候（以下略）」と、砲弾や元込め銃の広告が登場。第２５号までこれら５点の広告が冊子の最後を飾ることになる。



吟香が薬種類広告と治療広告からヒントを得たと考えるのが自然だろう。ついでながら、ヒコが長崎行きを決した背景にはワーラス組の宣伝広告があったのかもしれない。ワーラス組やオールマンブラウ組の広告はなんともきな臭いものだが、アメリカで南北戦争を目にしたヒコは日本も内戦必死とみていたに違いない。

精錡水に目を向けた銀香は慶応４年に上海に取り次ぎ所を設けてみたが、思うようにいかず結局、慶応４年閏４月（１８６８年、９月明治へ改元）、ヴァン・リードと組んで『横浜新報もしほ草』を創刊した。発行所は居留地９３番のリード宅。和紙二つ折り数枚綴じの冊子型。横浜３番目の日本語新聞だった。

「もしほ草」の創刊号で銀香は「曩にヒコザワの新聞誌ありしが、かの人此地を去りしのちは、久しく其事絶えたり」としたうえで「日本にていまだこの（新聞をつくる）事さかんに行はれざるゆゑんは、蓋し新聞紙の世に益ある事をしるすものすくなきことと、これを篇集する人のみづから學者ぶりてむづかしき支那文字まじりのわからぬ文を用ゐる事」と指摘。「新聞のさかんに流行することは、千里の外に奇談珍奇説坐ながらにして見聞し、門を不出して諸方の物價をしり、人の知識をまし、心志をたのしましめ又は商價の便利を得るなど其益ある事甚おほきがためなり、余是故に、日本にても新聞紙の盛に流行せん事を願ふ也」と高らかに創刊の辞を述べた。

基本的には『海外新聞』の精神を踏襲したものだ。読まれる新聞を意図したのか、たとえばヘボンが名優として売れている三代め澤村田之助を手術し、義足をつけた話では「平文（ヘボン）の國許へ（義足を）注文せしが、二、三日前にあつらへのあし一本、あめりかより來れり。近きうちに、あしつぎに田之助よこはまにきたるべし」とやさしい文章にした（『メディアの曙』）。

「もしほ草」に強い意欲をうかがわせた吟香だが、同紙が軌道に乗り出した慶応４年８月、編集から手を引き、政府が没収した「稲川丸」の差配になり横浜―東京間の定期航路の運行を開始。明治３（１８７０）年、１万両で買い取ったこの航路事業が「文明開花」の空気のなかで順調に進んでいた同５年２月２１日、「東京日日新聞」が、条野伝平、西田伝助、落合芳幾によって創刊された。吟香は「條野傳平氏は山々亭有人と號し、戯作を業とす。落合幾次郎氏は浮世繪師にして芳幾と號す。西田傳助氏は俳諧を好み妙傳司と號す」と後に「東京日日新聞縁起」で書いているように、３人とは顔見しりだった。「東京に至る毎に彼（西田）の社を訪ふて、新説を報知し、或は原稿を投寄する等の事」（前掲の縁起）をしているうち、明治６年９月中旬、「東京日日」に主筆として入社することになる。

『岸田吟香』によると、「編集人・岸田吟香」の名が同

紙上で掲載されるのは同年１０月２９日。一つの投書をきっかけに自由論のキャンペーンが展開された。この投書には「自由の理質問」の見出しがつけられた。「自由の理」は前年、中村敬宇がジョン・スチュアート・ミルの著書を翻訳して出版した『自由之理』を指す。

投書は「だれにも自由の権利はあるが、それぞれが個々の利益のことだけを主張すれば一致することはない。まず政府が全体の利益になることを民に示し、不服の者を教諭すればよい」（大意、原文は漢字カナ交じり文）という内容。吟香はこの投書に「この質問に答える投書（があれば）読者に示したい」という内容の付記をした。

このキャンペーンに中村敬宇が最初に応じた。イギリスには下院と上院議員がある、としたうえで「一巳ノ利益ノ聚合スルモノハ總體ノ利益ナリ」と説いた。

翌明治７（１８７４）年1月１７日、板垣退助らによって「民選議員設立建白書」が左院に提出された。この自由之理キャンペーンは時機を得たものだったといえるだろう。

ヒコはアメリカでリンカーン大統領に会ったことは何度もふれた。次号で述べるが、議会の存在も知るにいたる。そのヒコの知識が吟香を通して「自由之理」キャンペーンにつながったといえるかもしれない。

冒頭に述べたように東京日日新聞は現在の毎日新聞の前身である。現在発行されている日刊紙のなかでは最も古い歴史をもっている。では最も古い日刊紙となると、『横浜毎日新聞』を挙げねばならない。

同紙の創刊は明治３（１８７０）年１２月８日。第三代神奈川県知事、井関盛良が「新しい国の方針や行政、貿易、外交などを人々に知らせるには新聞を毎日発行することが有効」と考え、長崎在住の我が国の鉛活字の開発者、本木昌造に協力を求めた（『横浜から新聞を創った人々』）。井関は宇和島藩の奨学生として長崎に留学した経験があり、新政府の外国事務局に入って外務大丞も務めている。

創刊号は縦３２センチ、横２８センチ、タブロイド版ペラ両面刷り。定期購読者には毎朝配達し、遠方の読者には最寄りの取次所で渡す、と記載されている。現在の日刊新聞の配達の原型がすでにできていることが読みとれるが、これも、日刊ではなかったとはいえヒコが目指したものだった。

従軍記者第一号

『海外新聞』は購読費を支払う読者がわずかしかなかった。おおそらく瓦版が無料でバラまかれていたため、「新聞」と名がついていても市民には瓦版と同じ目でしか見なかったのだろう。「ただが当たり前」という読者に金を払ってもらわねば経営は成りたたない。「横浜毎日」の明治４年４月２０日付には「売弘所ひろまる」として、新たに横浜の４店のほか東京１店、大坂２店、神戸１店、長崎５店の販売店ができたと伝えている。これで１４店になり、新聞がまだ珍しかった時代に営業としてはかなりの健闘ぶりだった。

注目したいのは同年８月２６日付の「伝信機、東京―長崎間の工事進む」という記事だ。「今月十八日頃駿州沼津原辺駅にては頻りに伝信機の柱を取立居たり」とあるだけだが、新政府が長崎まで電信線を引こうと躍起になっていたことがうかがえる。ヒコがアメリカで見た電

信が着実に日本で根を張りだしたことを示すニュースである。
「東京日日」に話を戻そう。明治７（１８７４）年１月１９日､民選議員設立の建白書の全文を掲載したところ、投書欄で大論争が展開された。『「毎日」の３世紀――新聞が見つめた激動１３０年』によると、政府側の意見を代表して加藤弘之（宮内省四等出仕）が「文明開花は十分でなく、十のうち八、九は政府の何ものかも理解していない。そういう人たちに憲法をつくらせようというのは、木によって魚を求めようとするくらい難しい」と反対論を述べた。

これに対し大井憲太郎は馬城台二郎の名で２月５日に投書。「近時の新聞を閲するに副島氏初外七氏の民撰議院せつりつの建議を載するあり、余輩の曽て渇望する所にして此建議の実行あらんには即ち我国今一層進歩の序を得て万機に依り大に更張るする所あらん」と、強い賛辞の言葉を表した。
その大井は自由民権運動に携わり、明治１５（１８８２）年、自由党に参加、同１７年、秩父困民党を指導した。秩父困民党による「秩父事件」については、ラピス２０１８年春号で取り上げたので詳細は省くが、生糸価格が暴落したことから生活が成りたたなくなった秩父の生糸農家たちが蜂起した事件だ。フランスのリヨン生糸取引所で大暴落したことによる波及が、零細生糸農家を直撃したのだ。

もし生糸農家が欧州相場を知っていたら事前に手を打てた、というような単純なことではないが、開港して海外との交易を盛んにするうえで、世界の相場を把握しておくことが極めて重要であることを示す社会事象でもあった。この意味では、新聞は江戸時代の瓦版とは比較しようもないほど大きな役割を担うようになったのだ。この点でもヒコが『海外新聞』で生糸相場欄をつくった意義は決して小さいものではなかった。

ところで『東京日日新聞』の吟香。明治７（１８７４）年、政府が台湾出兵を閣議決定し、西郷従道が３６５８人の兵を引き連れて出兵。吟香は従軍記者の派遣を社内に説いて回った。あるいは吟香はヒコから南北戦争見聞記を聞いていたのかもしれない。ところが志願する者が一人もなく、吟香自ら現地におもむくことを決意。我が国従軍記者の第一号になった。戦況や戦地の様子、出征兵士の心理にまで立ち入って書いた「台湾信報」は人気記事になった（『「毎日」の３世紀』）。
最後に吟香とともに『海外新聞』の仕事をした本間潜蔵のその後にふれておきたい。『海外新聞』廃刊後の慶応３年、徳川民部介のフランスでの万国博覧会渡航に渋沢栄一らとともにつきしたがった後、フランスやドイツで学び、明治２年、オーストリア勤務の外務少録になった。さらにプロシアに勤務し明治８年、代理公使としてウィーンに駐在、明治１８年に帰国後、弁理公使などを務めた（『ジョセフ＝ヒコ』）。海外に飛躍したいとの希望をもって『海外新聞』の協力をした本間は、見事にその夢を実らせたのだ。